昭和六十一年度

高校生懸賞作文優秀作品集

途上国とのふれあい

国際化の時代のなかで、
高校生のみなさんより
途上国について多くの声が
寄せられました。

国際協力事業団

O
3
G
LIBR

JICA LIBRARY
1018629[4]

国際協力事業団

受入月日	'87. 1. 27	000
登録No.	15894	36 GAP

はじめに

国際協力事業団（ＪＩＣＡ）は、開発途上国に対するわが国の政府開発援助（ＯＤＡ）の主要な一翼を担い、政府ベースの技術協力（青年海外協力隊派遣事業を含む）を一元的に実施するほか、無償資金協力の実施、開発投融資、移住事業等の幅広い業務を実施しています。

当事業団では、次代を担う青少年が広く海外に目を向け、国際的視野に立ってわが国の置かれた立場を認識し、延いては国際社会における活動に積極的に参加することを願って、昭和三十七年より、高校生を対象とした懸賞作文を実施しています。

本年度は「途上国とのふれあい」をテーマとして募集しました結果、全国から二、七三四点の作品が寄せられました。これらの応募作品について審査委員会による審査を経て選出された入賞作品二十一点を、ここに一冊にとりまとめました。

入賞作品はいずれも優劣つけ難い立派な作品であり、国際化の時代と言われるなかで国際協力のあり方などについて、高校生の率直な主張が述べられています。これらの作品をご紹介することにより、一人でも多くの高校生にとって「途上国とのふれあい」の契機としていただければ幸いと考

えます。

最後になりましたが、作品の審査にあたられました審査員の先生方並びに募集にご協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げます。

昭和六十一年十月

国際協力事業団

総務部長　田島高志

目次

はじめに……1

一、昭和六十二年度高校生懸賞作文入賞作品

特選・外務大臣奨励賞……静岡県立磐田農業高等学校　鈴木宏尚　5

特選・文部大臣奨励賞……高知県立高知農業高等学校　小田義典　8

準特選……長野県長野高等学校　相澤清香　11

準特選……和歌山県立橋本高等学校　後藤多恵　13

審査員特別賞……千葉県立千葉高等学校　齋藤潤一　16

審査員特別賞……聖ヨゼフ学園日星高等学校　グェン・ティ・ミン・ティ　19

入選……宮城県仙台向山高等学校　梅津恵理　21

入選……作新学院高等部女子部　黒駒真喜子　24

入選……セントヨゼフ女子学園高等学校　今鷹佑　27

入選……聖ヨゼフ学園日星高等学校　松山直子　30

入選……明治学園高等学校　瓜田理子　33

佳作……岩手県立盛岡聾学校高等部　釜石智子　36

佳作……宮城県第三女子高等学校　志村知華子　39

佳作……宮城県仙台南高等学校　吉田二郎　42

佳作……東京都立狛江高等学校　谷口真奈美　45

佳作……兵庫県立武庫荘高等学校　細包剛　47

佳作……愛媛県立松山商業高等学校　影浦浩二　50
佳作……高松第一高等学校　北谷光　53
佳作……福岡県立浮羽東高等学校　柳多美子　56
佳作……川内純心女子高等学校　溝川靖乃　59
佳作……沖縄県立喜手納高等学校　町田宗和　62
学校賞及び奨励賞受賞校……65
二、特選・準特選及び審査員特別賞受賞者の研修旅行
日程……66
感想文……南米研修旅行を終えて　鈴木宏尚　67
感想文……南米研修旅行を終えて　小田義典　69
感想文……東南アジア研修旅行を終えて　相澤清香　71
感想文……私のみた東南アジア　後藤多恵　73
感想文……沖縄への研修旅行の感想　グェン・ティ・ミン・レイ　75
三、審査講評
審査を終えて……日本私立中学高等学校連合会次長　馬場孝正　77
資料編
昭和六十一年度高校生懸賞作文応募状況……81
昭和六十一年度高校生懸賞作文審査委員……81
昭和六十一年度高校生懸賞作文入賞者（校）一覧……82

一、昭和六十一年度高校生懸賞作文入賞作品

【特選】　外務大臣奨励賞

ブラジルに懸ける夢

静岡県立磐田農業高等学校　二年　鈴木宏尚

宇宙から帰還した飛行士が言いました。「地球は青く美しかった」と。無限の太陽が輝くこの大宇宙に、地球のような生物の住む惑星は外に見付かっていません。かけがえのない私達の地球、宇宙船「地球号」。

上空から見る大アマゾンは大樹海をなし、視界のすべてを緑で埋めつくし、静かに横たわっています。しかしどうでしょう。一度その密林に足を踏み入れるやそこは鳥獣の生の謳歌に満ちた世界なのです。そして、そこが、私のあこがれてきた土地なのです。

私は生き物を育てることが好きで、小学校の頃から、ペットの世話をしたり、畑で野菜を作ったりして、農業に強い関心を持っていました。そして、将来平凡に生活して行くよりも、何か大きな事をしようと考え、中学三年の時に決心したのがブラジルで農牧畜業をやろうという事でした。ブラジルは広大な土地が有り、日本では失われてしまったフロンティア精神が発揮される場所であり、これから先、最も農業発展の可能性が大きな国だと思ったのです。

ところで、私達を包む自然は生態系という一つの閉じたシステムを形成していると言われています。その部分システムと

して私達の祖先が営々と築き上げてきた農業システムがあります。しかし、このシステムは未だ完成していません。母体である自然生態系と農業との間には鋭い緊張関係があるのです。地球の砂漠化がその一例です。砂漠化の原因は降雨量の不足という気象上の自然的要因と、農業関係の土地利用という人工的要因によるものがあります。近年の砂漠化の増加は後者によるところが殆どであると言われています。

ブラジルの東北部には広大な砂漠があります。昔はここは森林であり、適度の降雨がありました。しかし十六世紀に砂糖きび栽培が導入されて以来、土地の様子がすっかり変わってしまいました。森林を焼き払い、無肥料で砂糖きびを栽培するなどして土壌保全を怠り、地力が落ちるとまた次の森林を焼き払っていったのでした。更には地力の落ちた土地に家畜を放し、少しばかり生えていた野草を食べ尽くさせ、砂漠化を助長させていったのでした。この焼畑農業は今でもブラジルの各地で行われているそうです。アマゾンの樹木も、ブラジル東北部の貧しい農民、現地資本、外国の巨大資本が入って次々と焼き払われています。つい最近まで私も、アマゾン開発こそブラジル発展の要だと思っていました。この考えはどうやら間違っていたようです。アマゾンは世界の酸素供給量の三分の一を占めているのみならず、ブラジルの降雨にも大変大きな役割を果たしているのです。もし、アマゾン砂漠が出現すると、南方へ熱砂の風が吹き、降雨量が更に減少して、ブラジルの気候風土は一変し農作物の生産ができなくなる地域もでてくると予測されてもいます。

したがって、ブラジルではアマゾン以外に農地を求めるべきです。例えば、セラードというブラジル全土の約四分の一の面積を占める疎林地帯があります。この地域は雨量が適度にあり、疎林地帯でなければならない必然性はなく、土地改良を行えば肥沃な農地に生まれ変わります。現に日伯共同で土地改良を行っているそうです。問題はそれを維持し地力の落ちることを防ぐ技術を確立することです。広大な農地で有機農業は可能でしょうか。化学肥料はどの程度減らせるでしょうか。無農薬栽培、遺伝子工学の応用等々と次々に課題が浮かび上がってきます。

限りなく広がる永久草地で若草を食む牛。綿羊の群。いつまでも肥沃さを失わない広大なとうもろこし畑。私は今、農業高校に学びながらそんな夢を追っています。そして、その夢を実現させる為、更に大学で多くの知識を吸収しブラジルに渡

るつもりです。ブラジルの人々と共に、焼畑農業をしないで済む農業技術を確立し普及させたいのです。永久草地だけでなく永久耕地を実現させたいのです。これは、農業の歴史が始まって以来未だ解決されていない人類の課題でもあります。

人類は自然生態系を無視しては生きていけません。大アマゾンは、後世へそのまま残す必要のある地球の遺産なのです。その大アマゾンを守るためにも、人類と自然との戦いではなく、調和に私は挑戦してみたいのです。農業という地球を相手にした仕事を通して。

【特選】　文部大臣奨励賞

海外に夢をかけて

高知県立高知農業高等学校　二年　小田義典

私は南米パラグアイで生まれ育ちました。両親は昭和四十三年パラグアイのイグアス地区に入植し百ヘクタールの原始林を切り開き畑や牧場作りに取り組みました。幾度かの危機をのりこえ、鶏六百羽、豚六十頭、肉用牛五十頭の繁殖と肥育を行うまでになりました。放牧された肉用牛は、気が荒らく母の手におえなくなり、乳牛と入れ変えカルピスやチーズを作る様になりました。こうした努力により収入も増え、生活にも余裕ができ、将来の希望も大きくふくらんでいました。ところが昭和五十年四月二十五日、父は突然の交通事故で死亡。パラグアイの土に帰ったのです。私には信じられないことでした。母も祖国を遠くはなれ父がすべての頼りだったと思います。父は厳しい中にも私たちと一緒になって走り、泳ぎ、笑ってくれるやさしい面もありました。当時私は十一才、四人の弟と妹一人、母は、移住地の厳しい環境の中で六人の子供を育てることができず、父を残して香北町の祖母の元に帰ってきました。

パラグアイでは、イグアス日本語学校で日本語を習っていましたが日本にきて以来、学校での勉強に大変苦労しました。しかし、パラグアイ生まれは強いんだぞ！と弟たちにも言いきかせてがんばりました。中学卒業の時、町長さんから始めての町長賞をいただきました。私の長男としての責任感と学校での努力に対し身にあまるお言葉を頂きました。このことで、父の代りをしなければならないと心に決めた日のことが思い出され感激と共に今後の努力を心に誓いました。

現在高知農業高等学校畜産科で学んでいます。将来、父のやり残した農業経営者になることを夢に一つでも多くのことを身につけていかなければなりません。

パラグアイの農業を考える時さまざまな問題点があるように思います。社会情勢にも不安な面があり、農業経営にもその影響が心配されます。畜産経営だけを考えてみても伝染病が多いうえ、恐ろしいツェツェ蠅などの家畜に対する衛生管理面に大変な遅れを感じます。

また、気候も不安定で、四十度越す夏から霜の降りる冬へと一気に変化し飼料作物の安定的な確保も大きな問題です。さらに、大規模経営における機械化農業は当然のことと思いますが、それらの機械の改善や能率的な運用面にもまだまだ改善の余地が多いように思います。

私は、卒業後パラグアイに帰り、父が残してくれた土地を基盤に指導的な農業経営者をめざしています。

今後衛生に関する知識を身につけ防疫対策を考え害虫防除や病気に耐える品種の研究をする予定です。また現地でも応用できる飼料作物の選択や栽培法を勉強し、栄養価の高い飼料の増収をはかり、安定的供給与方法を考えることにより現在の二倍から三倍の飼育密度にすることが可能だと考えています。さらに、大規模農業を管理するためのコンピューターシステムの勉強をしなければなりません。一頭一頭にきめ細かい管理は無理としても、多頭飼育に適したプログラムを組み、無駄のない繁殖計画を立て合理的な飼料給与と省力化を考えた経営を実行したいと考えています。さらに経営者としての技術を身につけることにより目標に近づくことができると思います。無論目標達成が簡単にできるとは考えられません。経営が、軌道に乗るまでには長い年月がかかり幾多の試練が待ちかまえていることは覚悟しています。

風土気候が違っていても作物を育てる心、家畜を育てる心には違いがないと思います。家畜に対する愛情を持って接すれば必ずや成果は上がるだろうと思います。きっと、いまはなき父も私の計画を応援してくれたことでしょう。

広大な土地、恵まれた水、気象条件を考えた時、あと少しの改善を実施することで、パラグアイの農業は飛躍的な進展をとげることが予測されます。しかし、そのためには進んだ知識と技術、旺盛な意欲を持った若い力が必要だと思います。

私はパラグアイに骨を埋める覚悟で、自分にできる限りの努力を重ね、畜産に関するあらゆる知識を勉強し、最新の体外受精から受精卵移植、さらに卵分割などのできる技術を身につけたいと考えています。また農業土木や農薬、肥料、農業機械など多方面に対応できる実力を養い、パラグアイの農業発展のため現地の人々と共に力を合わせて頑張ると共に、互に信頼し合える仲間としてパラグアイの産業発展に役立つような人間になりたいと考えています。

【準特選】

近くて遠い国々

長野県長野高等学校　二年　相澤清香

私たち日本人は、戦後アメリカからさまざまなことを学び、西側先進諸国の仲間入りをしようと必死に努力を続けてきました。そして今日、それを達成した日本の眼は、海のかなたの遠い国を見、決して眼下にある貧困に悩む国を見つめようとはしません。私はその『近くて遠い国』の存在を、ある韓国人留学生との交流を通して知りました。

この韓国人留学生との出会いは、私の母が長野市内にある国際親善クラブに入ったことがきっかけでした。そこで私たちは、当時明治大学三年生の伊（ユン）さんを紹介されました。私にとって、この伊さんは全くお面白い外人でした。私が日本以外の国の人と会うのは、それが初めてではあたませんでしたが、私がそれまでに会った外人というのは、日本人とは全く異なった（いわゆる白人とよばれる）人々でした。先に「お面白い」といったのは、伊さんが外見上、ほとんど日本人とかわらなく、日本人や日本語を日本人以上に理解していたということでした。

例えば、伊さんの言葉の中に、「日本人は知っている人には大変親切で礼儀正しいですけれど、私たち外国人ー特に東、東南アジアの人たちには冷たいです。」というものがありました。私はこの言葉に深く考えさせられました。日本人は、ヨーロッパやアメリカのことはよく知っているが、日本から一番近い東、東南アジア諸国のことはどれだけ知っているだろうか。興味がないという一言に尽きるのではないだろうか。そして、それらの疑問は答えとなって現われてきました。

伊さんを紹介してくれた国際親善クラブのの会長さんが「アメリカ人の滞在を希望する家庭は、選ぶのに困るぐらい多いのに対して、韓国人となると希望家庭が少なくて、頓んで受け入れてもらうという具合だ。」と嘆いていらっしゃいました。これは考えてみると不思議な話なのです。

まず、言葉の問題です。このクラブで紹介するアメリカ人は、ほとんど日本語が話せません。ですから、受け入れ家庭では、英語を話せることが必要となってきます。これに対し韓国人は、留学生がほとんどですから、日本語はお手の物とするところですし、とっつきにくい日本の生活習慣も知っています。

それから、互いの国の考え方の違いがあります。この会長さんの話では、アメリカ人は受けた親切に対し、ドライな考え方をします。受けた親切に対して感謝はしますが、親切を返そうとは思いません。そのかわりに彼らは、いつでもどこでも誰にでも親切にしようと思います。これに対し韓国人は、受けた親切を忘れません。親切をうけたら、それを返そうと努力します。どちらが正しいとはいえませんが、日本人には韓国人の方が温かく感じるでしょう。

これら二つのハンデをもっても、アメリカ人の方を日本人が求めるのには、何らかの強い理由があるはずです。それは、我が国の教育に英語が入っていることに関係しているかもしれませんし、国際性のある人間というのが『西側先進諸国と渡り合える人』という固定観念があるからかもしれません。いずれにせよ、日本のそうした西側先進諸国に開かれた目が、伊さんのいう『冷たい』ということなのでしょう。

伊さんが、我が家での滞在を終えた時、「日本と韓国は過去において、悲しい戦争というものがありましたが、私は新しい日本の良いところを見て、それを学びたいのです。」といわれました。私はこの言葉に、若い力が今日の日本を求めていることを知りました。先進国日本が見つめるべきところは、もはや遠い国々ではなく、こうした近隣の国々をよく知り、『近くて遠い国』にしないというところであると思います。

【準特選】

異文化と共に

和歌山県立橋本高等学校　三年　後藤多恵

「なぜそんなところへ…。」マレーシア留学の通知を手にした私に、多くの友人はこう言った。私自身、日本よりずっと南にある東南アジアの一国で暮らすことなど考えてもみなかった。留学するのは欧米だと思い込んでいた。だから初めはそういう友人の言葉を当然のように受けとめていたし、そうすることで自分自身を慰めていたような気がする。ところが日が経つにつれ、「マレーシアをこの目で確かめたい。」という気持ちが強くなってきた。というのは、アジアについては〝ある程度知っている〟と自負していながら、実は全くの無知だったことにショックをうけたからである。そしてマレーシアに、東南アジアに留学することを嘲笑するような周りの人々の言動に対する疑問と反感もあった。私はこの時初めて、わが国の欧米偏重時代の後遺症を痛感したのである。

一九八五年三月。クアラルンプールに着いた。そこで私が見たものは、ジャングルでも砂漠でもない、高層ビルや住宅が数多く建てられ、道路整備も充分でしかも緑の多い美しい街だった。〝まさに発展の真ただ中にいる国〟これがこの国に対する私の第一印象だった。マレーシアについて、少しは予備知識を得ていたにもかかわらず、途上国という言葉に何か暗いイメージを持っていた自分が恥ずかしくなった。

一年間の留学生活は、私に文化の重要性と多様性を教えてくれた。多民族国家であるためマレー・中国・インドの文化が

混在する中、私はホストファミリーを通してマレー文化に深く触れることができた。右手を使う食事方法、マレー式のあいさつ、サロンの巻き方等の生活習慣を見よう見まねで学び、イスラム教や彼らの考え方、価値感については時と共に徐々に理解していった。どんなに馴染みのうすい文化でも、それをありのままに受け入れようとする気持ちさえあれば、価値を認め理解することができることを体験した。

しかし今思い返すと、はじめの頃は〝ここは途上国で、日本よりおくれた国なんだ〟という意識がいつもついてまわっていた。それがカンポン（村）にいってから、その偏見が消えた。

カンポン（村）は私が滞在していた環境とは全く違っていた。その美しい大自然はいうまでもなく、住民は大部分がマレー人で、彼らの生活は昔ながらの習慣やしきたりに則したものだった。又、熱心なイスラム教徒で、ほとんどの女性は髪をスカーフで覆い、肌を見せないようにマレードレスやサロンを着ていたし、子供たちはコーランを学ぶための塾に通っていた。カンポンでの生活は全て、回教が中心となっていた。しかし彼らは異宗教に対して寛大で、マレー語もたどたどしい外国人の私を誰もが温かく迎えてくれた。ゆったりとした時間の流れの中の村の人たちと交わした言葉によって、その素朴さ、温厚さに心からふれることができた。

この様な生活を体験してみて私たち日本人が忘れかけている何かがあることを感じた。確かにカンポンの人たちは経済的にみて、それ程裕福でない。生活も質素である。しかし、今私にはそれまで持っていた、彼らに対してどこか憐れむような感情はない。その土地に根付く文化の素晴らしさ、普遍性、そして彼らの心の豊かさを知ったからである。散歩中に見かけた、小川で裸になって水遊びをしていた子供たち。彼らの生き生きとした笑顔に、本当の幸せとは何かを問われた気がした。

単一民族国に住む私たち日本人は文化に対する意識が薄い。そのためか、文化と文明を混同してとらえているように思う。途上国と呼ばれる国のすべてが自分たちより劣っているかのように、思い込んではいないだろうか、発展途上国とはあくまでも文明・科学・経済等を対象としているだけであり、決して文化に優劣はないということを、私たちは再認識しておく必要がある。

近年、我が国では何かにつけて国際性が問われるようになり、外国に関する記事やテレビ番組が急増した。中でもアジア諸国に関しては目を見張るものがある。日本もアジアの一国であることを認識し、自分たちの周りの国々を見なおそうという動きが高まってきたといえる。しかし、実際は無理解な人が多い。何故か。私は、日本がアジア諸国に対して、まだ経済面でしか深い関係を築いていないからだと思う。このままだとアジアの文化が身近になるのは難しい。

二十一世紀に向けて日本が世界に貢献できること、今の大きな課題である。私は教育面の援助だと思う。外国人にもっと大学の門を広げ、自国の発展に献身しようとする人を育てる。つまり人づくりである。そして又、そういう人たちを受け入れることで、彼らの文化がずっと身近になると思うのである。

「いつか日本で勉強したい。」マレーシアの友達の多くが目を輝かせて私に語った。彼らの夢が叶う日のくることを、希ってやまない。

【審査員特別賞】

今、私達にできること

千葉県立千葉高等学校　三年　齋藤潤一

私は昨年の夏、千葉県派遣員として、東南アジア四か国を訪問する機会に恵まれました。そこでこの体験をもとに、「途上国とのふれあい」のために、今、私達に何ができるのか考えてみたいと思います。

私の旅は現地の高校生との交歓が中心でしたが、ここでまず感じたのは、「人と人とのふれあいには、〝言葉〟というものがいかに重要であるか」ということでした。確かに、お互い同じ年齢同士、あるラインまでは「言葉が通じなくても…」ということが言えました。しかし、英語を通じて、互いの将来の夢などを語りあって、相手の考えを熟知した上で、初めて「心のふれあい」が持ち得るのだと私は実感したのです。私達はどうして、学校で英語を学んでいるのでしょうか。―欧米人と気軽につき合えるため、そして、アジアの仲間と真剣に国や自分達の将来を語り合うためでもあるのです。また、英語の外に、大切な言葉として挙げられるのが、「あいさつ」でした。私は、片言でも話せたらと思い、現地の言葉を学習して旅に臨みましたが、これが実に役に立ったのです。

香港の空港でのことです。出国審査の時、厳しい顔付きの審査官に、「多謝（トオシエ）。」（有難とう）と言ってみたのです。すると、周りにいた審査官まで笑顔で答えてくれ、しまいには、広東語で私の名前を呼んでくれたり、学校のことなどを尋ねられたりしました。マレーシアでは、町の警官に「サラマットティンガーハリ。」と呼びかけると、彼はすぐ、私の肩に手をかけて、

「今日は。」―意外な日本語にびっくりしました。現地の言葉たった一言にも、温かい「心のふれあい」があるのです。私にとって、何回もこのようなささいな事が、非常に新鮮な感動でした。やはり言語は、人と人との交流を可能にするための不可欠な手段であり、殊に途上国との対話においては、「言葉の習得」が重要な課題と見なされるべきだと思うのです。

次に私が感じたのは、人と人との交流に対して、「民族と民族」、「国と国」という、広い意味での相互理解が必要だということです。最近、東南アジア、そして途上国一般に関して、日本からの物質や文化流入の一方通行性（特に貿易面において）がよく言われます。私達日本人は、途上国＝「あらゆる面で日本より劣る国」という偏見にとらわれ、相手国から何も学ぼうとしてこなかったのです。ここに、相互理解の不均衡の原因があると私は思います。私達は、わずかな経済的な差だけで、その「民族」や「文化自体」が劣っているなどと混同してはならないのです。私は各国で、それぞれの国が持つ独特なすばらしい文化を知り、そして私達に見失われつつある、人々のエネルギッシュな生活、豊かな心を肌で感じて来て、相互理解における「偏見」の本当の恐ろしさ、有害さを思いしることができました。

私達は、もっとその国の様子や事情を素直に受けとめ、相手国のことを知る努力をすべきであると思います。その上で、他国の民族、その文化を自分達の文化基準で評価することを避け、尊重することこそ、本当に「理解し合う」ということだと思うのです。また、そうした理解によって、自国〝日本〟の立場を鏡で映して見ることもできるのです。

実際、途上国との国際交流は、他の先進国との関係に比べ、「経済的格差」という難題が加わって、非常に困難な事であるというのは事実です。そして、そのためにまず国家が単なる経済援助や融資といった物質的な関係だけでなく、「技術教育の普及」等のより精神的、本質的な関係を推進することが第一の条件なのでしょう。しかし、私達が普段、学校で英語や地理や歴史を勉強することも、TVや本で海外のことを知ることも、「今、私達にできる」途上国とのふれあいの第一歩なのです。私達は、将来国家を担うためにも、そのことを気に留めておくべきだと思います。

私は、この旅を通して、もし私達が視野を広くもって、胸襟を開いた態度で臨むなら、このお互いの対話が不可能でないこと、そして、それが実った時のすばらしさを感じ取ることができたように思います。"We Are The World"―シンガポー

ルの学生達と、肩を組んで大声で歌ったことが、私には忘れられません。日本と他の途上国の国々が、「同じ地球にいる仲間」として、経済的にも、同等の立場で話し合える日が必ず来ると、私は確信しています。

【審査員特別賞】

平和を願って

聖ヨゼフ学園日星高等学校　二年　グエン・ティ・ミン・レイ

「何故私は愛する祖国を離れなければならなかったのですか。何故、何のために祖先、親友、そして愛する町のすべてを捨てて、この異郷の地で生きなければならないのですか。そして現在と将来の私は…。」この自問はいつも私の心の中に存在しています。それに対して今の私は自答することはできません。

私は、白砂青松の地、ニャトランというベトナムの都市で誕生したベトナム人です。七年程前、私は家族と他の八十七人の仲間と一緒に小さい舟で太平洋を苦しみながら渡りました。

夜、港ではない岩礁を出て三日間。雨の中、焼ける程の熱い太陽の中、みんなの顔と肌はだんだんボロボロに荒れて、しょっぱい海水が当たると大変しみてがまん出来ません。食糧は何もないし、水しかないので、子供達はお腹がすき、叫んで泣きました。とてもかわいそうでした。私もお腹がすいていたけれど、叫けばないで水を飲んでがまんしました。朝から夜まで海しか見えませんでした。鳥、一羽でも良いから見たいと思いました。この時、私はあきらめて、死ぬことしか考えませんでした。しかし海の中に沈んで死ぬ位なら、自分の故郷で死んだ方が、ずっと幸せだと思いました。しかしよく考えるとやっぱり死にたくありませんでした。それで、あきらめないで神様に「どうか私達の生命を助けて下さい。」と両手を合わせて祈願しました。舟酔いでずっとはきました。とても苦しいでした。少しお米がありましたが、お鍋も燃料もなかったので、

煙突にのせてたきました。それを皆で少しずつ分けていただきました。時々舟に飛び込んできた飛魚をやいて食べました。食べるというよりのみ込むと言った方が正しいと思います。かゐ力がなくなっていたのです。ところが三日目の昼頃、急にどこからか、風が強く吹いて来て、口では言えない程恐ろしい波になってきました。皆は大変こわがって舟の横にしっかりつかまりました。もし、ちゃんとつかまっていなかったら、すぐ海に落ちてしまったと思います。ところが夕方になって大きな石油を運ぶ船が私達の舟を見つけて助けてくれたのです。台風だったのです。助けてもらえなかったら、私は今ここにいません。三日間、四苦八苦している時に生命を助けてもらい、その後一週間程かかって平和である日本に着きました。

「千年中国の奴隷になり、百年フランスの奴隷になり、二十年……。」と皆が歌っていたように私の国はずっと戦争を続けている国です。私はあまりにも幼い頃に出国したので、国の歴史についてはよく知りません。しかし、祖国にいた十一年間のことはまだ胸に残っています。私は九年間豊かで平和な日々を生きました。突然ある日、北から南まで激しい戦いが起こり、共和党は共産党になってしまいました。

今平和である日本で、私は一生懸命勉強しています。それはまだ戦争で苦しんでいる同胞や将来の祖国の平和のためです。そうした中で、祖国のことをもっと身に付け、他国の人々に伝えられるようになりたいと思います。そして一番大切にしたいことは母国語を忘れないことです。私は今は、何も出来ませんが、平和な国の人々は平和ではない国にもっと目を向けて欲しいと思います。互いに平和な国にするために協力し助け合えるように考えてほしいと思います。舟でさまよっている人を見たら、食べるものがない人を見たら、住む家がない人を見たら、言葉の不自由な人を見たら、家族が離れ離れになっている人を見たら、悲しんでいる人を見たら、学校に行きたい人を見たら、手をさしのべて欲しいと思います。

近い将来、平和で明るくベトナムが生まれ変わり、その祖国に帰れることを願っています。そのために、私は今、精一杯勉強し、日本の文化を学び、たくさんの人々と分かち合い、やがては、ベトナムに帰り、祖国の平和のために、アジアの平和のために、世界の平和のために役に立ちたいと願っています。

特に、日本とベトナムが手をつないで生きていけるように働きたいと思います。

【入選】

一つの体験から

宮城県仙台向山高等学校　三年　梅津恵理

今まで興味のなかった国が、ある日突然、興味のある国に変わってしまう、そんな変化が私に現われたのは、二年前の夏、偶然メキシコを旅するチャンスを手に入れた時からだった。

私がメキシコに着いて驚いたのは、首都メキシコ・シティが、意外にも歴史的重厚さを感じさせる大都市だったことである。しかしそんな街の中にも、菓子などを売り歩く小さな子供達の姿が目についた。わずかに十才にもならないほどの子供達が、言葉もなく近づいてきて、品物を差し出し、もの悲しそうな目で私達のことを見上げるのである。日本であったら、幼稚園や小学校に行き、毎日楽しく学び、遊ばなければならない時期である。あのメキシコで出会った子供達の瞳を、私はなぜか忘れることができないのである。

このように、子供の時から学校に行くこともできず、満足な教育も受けられないというような現状は、世界中の多くの開発途上国で見られることだと思う。

誰もが知っているように、開発途上国には、先進国に比べると遅れている面が多くある。例えば鉱工業にしても農業にしても、それに対応する技術が十分ではないため、それらの資源をうまく活用することができないのである。近年、日本を初めとする先進国の技術者が開発途上国に出かけ、技術指導を行っている。私達が教えた技術を使うことによって、その国が

発展して行き、私がメキシコで見た、あの少年少女達の瞳が、子供らしい明るさで輝くようになってくれれば、こんなにうれしいことはない。

しかし私がこで言いたいのは、開発途上国は、やはり〝後進国だった〟などということではない。私は決して、開発途上国が全ての面において遅れているとは思わない。その字のように、開発が遅れているだけであって、後進しているわけではないのである。

現在、日本の若者で、開発途上国に興味を持っている人は少ないように思われる。そういう私自身も、ついこの間までは、そのような国々に興味をもっていなかった。しかしメキシコを旅し、その文化や伝統、週間を知っていくにつれて、だんだんと興味がでてきたのである。私がメキシコで出会った人々は、〝アスタ　マニャーナ〟（また明日）という言葉が表すように、皆陽気でのんびりとしていた。私達から見ると、なまけているようにも見えてしまうほど…。私も、そのスローな行動や、時間通りに進まない列車に、いらいらすることがしばしばあった。しかし、毎日勉強や仕事に追われ、いつも時間と競争しているような生活を送っている日本人と比べると、どちらが幸せなのかは私もよく分からない。どんな国にも歴史と共に築きあげられてきた慣習や民族性があり、それらは、先進国においても、開発途上国においても、尊重されなければならないものであろう。

我々先進国の人間が、開発途上国を援助するのは当然のことで、私達がしなければならない仕事だと、私は思っている。しかし、私達が開発途上国に行き、技術指導を行うにしても、その国の人々の生活習慣などをよく知らなければ、うまくやっていくことはできないだろう。そして、それらはその国の歴史的、社会的、自然環境の下につくられてきたものであって、簡単に変えられるものではない。また私達が変えるべきものでもない。あののんびりとしたメキシコ人が私達日本人のようにやっていけるとは、とても思えない。それは決して、どちらが善い悪いの問題ではない。私達を学校の教師に例えるなら、生徒である彼らに、教師の考えだけを押しつけてはうまく育てていくことはできないだろう。生徒の性格や考え方に合ったやり方で、接していく必要があると思うのだ。その国の力になるためには、その国のことを知らなければならない。何も知

らぬまま先進国の独善的な価値観で判断すれば、その国の文化や、その国の人々の生活を崩壊しかねないからである。例えば、あの素晴らしい文化的遺産―古代の人々が私達に残してくれた文明の跡（チチェ湖・イツァの遺跡など）を、誰が壊していいものだろうか。メキシコ・シティは大都会となってしまい、スモッグにおおわれた街となってしまったが、一歩郊外に出ると、星が美しく輝き、澄み切った夜空には、螢が飛びかうという素晴らしい自然が広がってした。あの美しい自然を、誰が奪ってしまっていいものだろうか。これらを傷つけることなく、私達が開発途上国と手を取りあっていくことこそ、今必要なことではないだろうか。そして私達が、お互いを尊重し、理解し合うことができた時、初めて真の国際協力への道が開けるものと思うのだ。

【入選】

―異文化との出逢い―

作新学院高等部女子部　三年　黒駒　真喜子

「ナマステ。」ネパールの人達は、手を胸の前で合わせ、頭を軽く下げながら挨拶します。私は昨年の八月に、青少年赤十字海外派遣団の一員として、タイとネパールを訪問してきました。先進国日本を離れ、他国の生活に直接触れながら現地の人達との交流を深められた事は、貴重な体験でした。特にネパールでの生活はまさしく「異文化との出会い」であり、私に大きな感動と衝撃を与えました。

カトマンズの空港を出た私の目の中に、広大なヒマラヤの自然がとび込んできました。その所々から顔をのぞかしている赤レンガの建物が、まるでおもちゃの様です。その光景は、それまで私が想像していた様な荒涼たるものではなく、むしろ温かさを感じました。ところが町の中に足を踏み入れて見ると、その光景は一転していました。町全体がごみごみしていて、華やかさが感じられないのです。食料品が置かれている市場も、けして衛生的ではありません。信仰心の強さを象徴するかの様に、いたる所にお寺が見られますが、貧しい人達が沢山住みついているなど、かつて文化が栄えていた頃の面影を残しているものは、ほんのわずかでした。

そんな街中を歩いて行くと、道端に座りこんでいた貧しい人達が、お土産品を手に私の周りに集まってきました。その中のまだ六才ぐらいの男の子が、老人の手を引きながら、買ってくれといわんばかりの目で見つめるのです。けれど、私はど

うしたら良いのかわかりません。そこから逃げだしたい気持ちになりました。目の前の光景を現実の姿として、素直に受けとめられなかったのです。私は、ネパールの抱えている問題の一つに、直面した様な気がしました。

ネパールは、国土の八十％以上が山岳地帯になっています。その為、特にそこに住む人達にとって、水の確保は極めて難しくなっています。その上、やっとのことで確保できるわずかな水は、清潔なものではありません。その水が飲料水となるのはもちろんのこと、食器や衣服、体を洗うのですから、衛生状態も自然に悪くなってしまうのでしょう。ネパールでの疾病の大部分は水因性であるとまで言われています。

この様な状況をふまえて、日本赤十字社をはじめ、色々な団体が飲料水供給事業を推し進めているのです。我が青少年赤十字では、募金活動による資金で、既にハンドポンプ式井戸を五十基と、自然流下式簡易水道を二基設置することができました。

その井戸を観察した私は、この事業の偉大さを改めて実感させられたのです。井戸を囲み、勢い良く出てくる水を手いっぱいにすくいながら笑う子供達の笑顔は、とても輝いていました。そしてその笑顔の裏に、今まで飲料水確保と言う基本的欲求が満たされず、過酷な生活を続けてきたネパールの人々のことを考えると、胸がつまる想いがしました。山中での生活の場合、一日一人当り十～十五リットルの生活用水が必要とされるそうです。私達が水洗トイレで消費する水の量は一回約十リットルとほとんど変わりません。私は、水の大切さを忘れかけていた自分が恥ずかしくなりました。

ネパールの人達は、物質的には豊かではありません。あまりにも物が豊かな環境で育った私にとって、ネパールで見たものはより厳しいものばかりでした。けれど彼らは生活感に溢れていました。瞳は澄んで美しく、時折ふと見せるまなざしは怖い程でした。彼らには「明日」があるのです。どんなに貧しく、つらい生活の中でも、笑顔と優しさは忘れることなく、そして力強く生きていました。

今回の訪問で、私は開発途上国に対する認識を深めることができた様に思います。私達の心の中には、途上国に対しての暗いイメージが潜んでいますが、実際は違っていました。とは言うものの、その思い違いの固定観念は、私達の頭からなか

なか離れようとはしません。確かに途上国は、医療問題をはじめ沢山の問題を抱えています。それに私達がどう対応して行くべきかと言う事が、今後の大きな課題だと思います。私には、今何ができるだろうかと考えてみると、まだはっきりとした答えが見つかりません。私は世界の大きさと、そこにある矛盾を感じながら、ちっぽけな自分を思い知らされました。

けれど、この「異文化との出逢い」は、私に、自分の事しか見えなくなってしまう人間的未熟さを、そして、与えられた境遇の中で懸命に生きることのすばらしさを教えてくれました。と同時に、将来は先進国と途上国との間に差がない、明るい世界でありたいと言う理想を、うちたててくれたのです。私はこの理想を胸に、また必ず、ネパールを訪れたいと考えています。

若い国ネパールは、私を大きく成長させてくれました。そんなネパールに、私は感謝の気持ちでいっぱいです。

【入選】

途上国とのふれあい——現状の理解から

セントヨゼフ女子学園高等学校　三年　今　鷹　祐

今、発展途上国が本当に必要としているものは何か。

先日、バングラデシュに青年海外協力隊の一員として行っていた私達の学校の卒業生である、中谷さんとい方の話を伺った。一番驚いたのは、「バングラデシュの人々は、よくテレビで見るような荒んだ状態では決してない」ということだった。少なくとも、そこの人々は、自分達のことを少しもそんな風には考えていない。そこの人々は、自分達に誇りを持ち、むしろ、私達のことを日本で生まれたから可哀そうだ、と思っているらしかった。私は、自分が日本で生まれ育った日本人であることを、決して可哀そうだ、とは思っていない。他のほとんどの日本人も私と同じであろう。それならば、バングラデシュの人々も私達と同じように考えていても、当然ではないだろうか。私達は、当然のことを当然として受けずに間違って考えてきたのではないだろうか。バングラデシュの人々が求めているのは同情ではない。

最近、「援助慣れ」という言葉をよく聞く。先進国から届く援助に頼りきってしまい、自分で食糧を作り出そうという気持ちが薄れてゆく。つまりは、援助が発展途上国の自立の妨げになっているのである。大分前になるが、新聞にアフリカの人のバングラデシュと同じような声が載っていた。「私達は、皆が皆飢えているわけではない。アフリカの人々が皆貧しいとは考えないで欲しい。」と。後に、そんなことを言うのは、本当に困窮した状態を知らないからだ、という反論も載って

いた。その時の私は、その反論の方に賛成した。そういう考えを持っている人もいる、ということを知って少々ショックだったし、なぜ、そんな人の好意を無にするようなことを言うのか、と腹も立ち、その人は、自分は飢えても貧しくもない、ということを言いたいだけなのだと思った。もしかしたら、他のアフリカの人々も同情なんかいらない、と思っているのではないか、とは少しも考えてみなかった。誰が、「あなたは貧しいから、可哀そうですね。」などと言ってもらいたいだろうか。

バングラデシュは十五年前、パキスタンから独立した。今は、八十パーセントもの資金援助を、外国から受けているそうである。国会議事堂も、八十パーセントの外国からの援助で建立された。この数字を、国民は知っているのであろうか。あの立派な国会議事堂が建てられたのも、こうして国家が成り立っているのも、ほとんどは外国のおかげと知ったなら、誇りを保っていられる人は何人いるだろうか。先進国の人々は、誇りを失った人々の姿を見て満足だろうか。私達は、発展途上国の人々に恨まれるために援助しているのではないはずである。しかし、悲しいことに、私達の援助は、恨まれても仕方のないようにしか役立っていない。同情して物資を送ってやったのだから、後はどう使おうと向こうの勝手、では済まされない。

バングラデシュの女の人はほとんど外へ出ない。私が学校で話を伺った中谷さんは、ジーパンをはき、バイクで走り回って、奇異の目で見られたそうである。あなたは、本当に女か、と。中谷さんが、バングラデシュでしていらっしゃったのは、そのめったに外へ出ない女の人達に、野菜作りを教え、それを市場へ売りにだすことを勧めることであった。今、三年経ったが、まだ売りに出してはいなく、野菜作りをしている段階だそうだ。これだけでも、その仕事がどんなに大変か分かるだろう。しかし、少しずつではあるが、自立への道へと歩んでいることは確かである。荒んだ状態を描くだけのテレビ番組や新聞記事は、同情を誘い、物資の援助を導くことはできるかもしれないが、発展途上国を自立させる解決方法を、何も見つけ出せることはできない。

今、発展途上国が、私達先進国の者に、本当にもとめているものは何か。それは、決して同情からの物資援助ではない。もちろん今は、物資の援助が少しも必要ないというわけではないが、それにもまして、彼らが本当に求めているものは、本

当の意味での援助、つまり、食糧を作るための技術、教育などである。この本当の意味での援助は、物資の援助とは比べものにならないほど困難である。ましてや、親に頼りきって生活している私達高校生にとっては、できるはずもないものである。だから、今は、身勝手な同情を捨て、少しでも、発展途上国の現状理解することを心掛けている。

【入選】

十八歳の夢

聖ヨゼフ学園日星高等学校　三年　松山直子

フィリピン。二月末に、約二十年のマルコス政権に終止符を打ち、アキノ政権に変わったことで今年前半の話題をさらった国。飛行機でわずか三時間四十五分の彼方のこの国は、富める我国から見れば完全な別世界であった。

私は高校二年の夏、学校主催の研修旅行に参加し、この国に約二週間半滞在した。毎日多くの予定が組まれており、決して楽な旅行とはいえなかった。二度にわたるホームステイ、数多くの施設訪問で毎日私達はくたくたに疲れてしまった。いや、疲れてしまったのは身体だけではなかった。色々な経験をする度、今の自分の立場や存在について、そして人間の在り方などへの疑問が生じ、それらは私の心を疲労させた。友達と共に来た海外旅行にはしゃぎながも、心の中は疑問の影に覆われていた。

しかし私の目に写るこの国の人々は大変楽天的で、いつも笑っている様であった。私達が一度目のホームステイをしたルソン島北部イザベラ州の貧しい農村であるケソンという村の人々も、そして首都マニラのスラム街、リベリーサの人々も、フィリピン内で数少ない障害者施設で車椅子にのっていた子供達もラジオにあわせて歌い体を動かし、また全くの他人であった私達を昔からの友人の如く扱ってくれた。家や生活は貧しそうであったが彼らの様子には貧困という深刻な問題をうかがわせるものが見あたらなかった。「もしかすればこの人々は案外幸せなのではないだろか。」私の心をこの様な考えがよ

ぎった時であった。マニラのスラム街で医療関係の奉仕活動をしておられるシスターの言葉がそれまでの私の考えを完全に否定してしまった。

「この国の人々は貧しければ貧しいほど、明るく過ごそうとするのです。しかし朝になるとリベリーサでは多くの子供達が学校へ行くために必要なわずか五ペソ（約六十五円）を親からもらえず学校に通えないことがあったり、朝食を食べられず泣く子がいたりするのです。貧困による教育の未浸透によりこの様な生活を改善すべく社会に訴えることも知らないため、彼らは自分達の生活環境に半ばあきらめに近い感情をもっているのです。」「教育」この二文字が私の盲点であったのだ。そういわれてみれば昼から道路に立ち、信号で止まる車を売り歩く多くの少年がいる。宝くじを教会の前で売っていた五歳位の少女、花のレイを売っていた子もいた。リベリーサで知りあった十七歳の少女は、

「大学へ行ってもっと勉強したかった。けれどお金がないから。」と諦めの笑みを浮かべて言っていた。教育をうけることのできない若い彼らこそが貧困の犠牲者なのだ。

私は思う。国と国との発展、人間同士の平等、そして自由な生活を作りあげるために次世代を無視することはできないと。貧困、不平等からの本当の解放のために教育へもっと多くの援助がなされるべきではないか。決して理想論を述べる訳ではないが、教育が発展途上国内に浸透すれば今以上に学術や文化の交流もさかんに行われ、国同志の理解を深め、それが真の世界平和につながっているのではないだろうか。

発展途上国への援助は国からするものだけではないと私はあえて言いたい。私達民間人にも参加できるものも多くある。対フィリピンに限っていえば二ヶ月三千円で一人の子供を学校へ行かせてあげることのできる里親制度というものもある。私もそれを知った時、参加したいと思った。しかし今の私の立場ではその様な事はできない。だから私はフィリピンで知りあった多くの同世代の少女達と文通をしている。彼女らの手紙は常に新鮮な異文化の息吹きを伝えてくれる。そして、また、知る限りの英語を、時には絵で表現した日本人である私の手紙が彼女らに何か少しでも役に立つことを願っている。今日も私のリンへのエアメイルが空を飛んでいるはずである。

私が学業を終え、はじめて給料を手にした時、フィリピンの一人の少年（もしくは少女）の里親になりたいと思っている。結婚をするより早く、私は異国に子供をもつことになるのだ。そしてその私の子供達が、更に次世代を背負ってすべての困っている人々のために働いてくれるなら、どんなにすばらしいことであろうか。皆がいつでも世界を単位にその必要に応えていけたら……。

これが十八歳になったばかりの私の夢である。

【入選】

アジアとの出会いを通して

明治学園高等学校　三年　瓜田理子

日本は一様序列社会である。点数の僅かの差によって人間の存在価値が決まる風潮は問題にはなっても消えることはない。「モノサシ一本」の価値観に脅かされている青少年の登校拒否や自殺は増加し、いじめは日常茶飯事となってしまった。点数主義の価値観の中にいた私が、この一様序列性に疑問を抱き、多様な価値観の必要性を強く感じた自己変革は、アジアとの出会いから始まった。

高二の夏、「開発と環境」を研修テーマとしたスタディ・ツアーに参加し、私は初めてマレーシアとタイを訪れた。パパンの放射性廃棄物の大量野外投棄場では、典型的な第三世界への公害輸出を目の当たりにし、他国籍企業の倫理性のなさを思い知らされた。我々に何が出来るのかという問いに対し、住民運動のリーダーが切実に訴えてきた。

「どうか日本に帰ったら皆さんに伝え、日本で工場撤退運動を起こして下さい。」その時の私にはまだ彼らの立場や連帯の意味を理解することが出来なかった。人権剥奪という切迫した状況に陥る事なく、快適な暮らしをしていた私には、高レベルの放射線量に対する恐ろしさしか感じられなかった。

マレーシアでの研修後、タイに来て三日めバンコク最大のスラム、クロントイを訪れた。密集する堀っ立て小屋の間を注意深く進んでやっとプラティープさんに会って話を聞くことが出来た。スラムの最大かつ深刻な問題は、強制撤去や社会的

抑圧に見られる人間としての保障の欠如であった。スラムに限らず、それはアジアの人々にとっても根本的な痛みであることが、ツアーに参加してようやく私にもつかめてきた。人権剥奪。その剥奪された権利を奪い返す権利回復運動こそ、真の開発であったのだ。

今なお強烈な印象を伴って思い出されるのは、真の開発に従事している人々の溢れんばかりのエネルギーである。日本で私達が第三世界の暗の部分だけを目にすることが、いかに偏見に満ちた危険な事かを痛感した。

帰国後、マレーシアとタイの友人らと手紙を交わし、ツアーの報告書をまとめているうち、視の態度が一変し、妨害的になってきた。ツアー後すぐに勉強に全力投球するものと思っていた視にとって、私の行動は苛立ちと焦りを与えるだけのようだった。が、ツアー中知り合った多様な価値観を持った人々に刺激を受け、私は初めて学歴偏重の圧迫感で個性を失う事に危機感を抱いた。そして知識や体験がじっくりと血肉化している今、自分の道を見つけようと決意した。

「自己本位」という言葉を得て強くなった私は、本質をガッチリと捉えたジャーナリストの著書を読み、強い共感を抱いた。

「過去のすべての支配階級は、好んで人類愛をとなえた。だが、我々は敵を愛することは出来ないし、社会の醜悪な現象を愛することは出来ない。自分を殺す相手を『理解』しながら殺されるよりも、戦うのは当然です。殺される側にとっては、『理解』しつつもまず戦うことが先決なのです。」

私は今、ようやくパパンのリーダーが訴えた声、カラワン楽団の一人が私の手を握って、「NO MORE HIROSHIMA …。」と叫んだ声を聴くことが出来る。私自身が自分の問題として、偏差値絶対主義と闘い、殺される側に置かれたからこそ、権利回復運動に携わるあの多くの人々を身近に感じられるのだ。

電気さえ入っていない村々に日本製品を溢れさせ、自給自足の共同体社会の伝統が強く残っていたアジアの村々を確実に根底の所から崩壊させていく殺す側の企業とその恩恵を被っている我々消費者。殺す側の日本人が、自国の問題に目を向けず、善意で第三世界の人々と連帯したとしても、それは決して何かを変革する力にはなり得ない。ことの真相を知らぬ善意

が、当事者にとっては、結果としてしばしは悪徳となり、真の共感につながらぬことを痛感した。私自身、タイのイメージを暗くする事が起こると知らず知らずのうちに擁護する立場を取っていた。だが、真の問題把握をするには、感情を越えて、相手の特殊な立場、複雑な政治的、経済的、文化的背景を捉えなければならない。

海外協力とは、先進国民である我々が第三世界の人々との関係を見直す事なのだ。我々が、自分達の問題として、日本社会の歪んだ構造を変革していく時こそ、第三世界の人々との連帯が生まれると思う。第三世界の人々と連帯し共存していく二十一世紀に生きる我々若者にとって、日本社会の大きな問題とは、個性に合った生き方を阻止する一様序列性である。私は、感情を越えて本質を捉える力を養うためにも、人間のあり方を問いかける殺される側の人々に学び、画一化された価値観を脱し、興味関心に合った自分の道を進んでいくつもりだ。

【佳作】

もっと青年海外協力隊を

岩手県立盛岡聾学校高等部　二年　釜石智子

日本は今、飽食の時代にあるという。だが赤道付近から南以降の、アフリカ等の発展途上国では飢えと貧困に苦しみ、そこにはひびわれた大地と、ただ救いを求めて、うずくまっているだけの人間の姿がある…。

私たちは金さえあれば何でも手に入る。そして私たちの回りには〝物〟がありふれている。だのに、私たちと同じ人間でありながら、彼らには金はおろか一ぎれのパンも、水すらもままならない。

この差はどこから来ているのだろうか？同じ人間でありながら、何故こんなにも違うのだろうか？

それには色々な理由があるが、その中で、私は次のようなことが原因ではないかと思う。

今、飢えている人々は、食物はほとんど援助にたより、自分で作ろうとしなくなっているという。農場はあるけれど、国が独立してからは国営化し、政府がそこを小作農場に指定した。だが、水が足りなくて、とても田植えは出来ない。トウモロコシなどの雑穀ならそれくらいの水で十分作れるのだが、法律にふれてしまうからダメだという。国がそこを小作農場に指定しているから、小作以外は作れないというのだ。こんな、現場を無視した政治があるから、ますます飢えてしまっているんだと思う。それに農民がいくら働いても、お金はもらえない。政府はちゃんと賃金は払っているのに、彼らの手に届かないのは政府の末端の役人達がその金を彼らに渡さずに着服しているらしいとのこと。これでは農民もやる気をなくし、自給

率を低下させてしまう。

私たちは今まで、その飢えに苦しんでいる人々を救おうと、寄付金など色々なものを全国から集め、援助してきた。それはアフリカの難民にとって、本当に救いとなった。十分とは言い難いけれど、救うことは出来た。けれどそれをずっと続けていたら、彼らは他国の援助にたよってしまい、自給自足が出来なくなってしまう。

今、難民を救うために必要なのは食糧とそれを運ぶために必要な車のガソリン、予防注射などだが、それだけでは本当に解決したとは言えない。

そこで、私は食糧、資金援助の他にもう一つ、青年海外協力隊への参加を今まで以上に普及させることも重視した方が良いのではないかと思う。もちろん、海外協力隊はもうとっくの昔から始めているけれど、今のままでは、アフリカを救いきれない。

アフリカが飢えてしまったのは、政治の悪さの他に、それを乗りこえるだけの経済力と知識がないことも原因の一つになっている。

私が青年海外協力隊を重視し、よりいっそう普及させたいと思うのは、アフリカが立ち直るための土台として、それに必要な知識を教えることが一番良いと思うからだ。

食糧危機の直接の原因となっている土地の砂漠化は、人々の無知のために、どんどん進んでいる。かつては見渡す限りの草原だった所も、人々が多くの家畜を連れてきて、その草の根まで食いつくしてしまったり、畑を作るために、森林を焼き払ったりする。せっかく作った畑も、役に立たないとわかると、また別の所へ行って、緑を焼き払う。そうして緑はどんどん減り、自分で自分の首をしめているのだ。

人々の無知のためにますます悪くなっていることはたくさんある。それをなくさなければ、貧困を乗りこえるだけの知識がなければ、いくら食糧、資金援助をしても、有効に利用されないでしまうかもしれない。

私たちが政治を変えるということは出来ない。でも、彼らにそれだけの知識を教えることは出来る。他国からの援助を有

効に利用し少しずつ自給率を上げる。私たちは、それに必要な知識を彼らに教えるのが、一番良い方法ではないかと思う。医学、農業…様々な分野の必要な知識を教えるために、青年海外協力隊が重要になってくるんだと思う。

日本にも協力隊はあるけれど、アメリカ等には万単位の人々が隊員になっているにもかかわらず、日本はその半分にも満たないという。

同じ人間として、放っておくことは出来ない。だから、私達先進国は、アフリカ等の発展途上国を救おうとする。義務でやるのではない。同じ人間だから、皆幸せになってほしいから、救うのだ。その心を、もっと多くの人々に理解してもらいたいと思う。そして、私達に出来ることは、必要とするだけの資金と食糧と、そして必要な知識を送ることだと思う。

だから、食糧、資金援助と平行に、海外協力隊をもっともっと増やして行ったらいいと思う。

難しいことだけれど、土台からやり直さなければ、いつまでたっても解決出来ないからだ。

【佳作】

途上国とのふれあい——私の体験から

宮城県第三女子高等学校　二年　志村知華子

あなたは、目をそらしていませんか。

途上国と呼ばれている国々から。

「フィリピンからの短期留学生が来ているの。よかったら、いっしょに学校へいってもらえないかしら。」私の父の友人から電話がありました。これが、私が途上国に接する入口でした。私は、自分の話す英語が通じるだろうか、フィリピンという国はどのような国なのだろう、などの不安を抱きました。しかし、私の心の中では、その不安より、新しい友達ができる、という喜びの方が大きくなっていきました。そして、いよいよ彼女といっしょに通学する日がきました。「ワタシノナマエハ、ロッシェルデス。ワタシハ、ジュウヨンサイデス。」彼女は照れくさそうに微笑みながら、日本語で自己紹介をしてくれました。彼女が日本語で話してくれたということが、私にはなぜかむしょうにうれしかったのです。

彼女は、登校中、まず、信号におどろきました。フィリピンには信号がなく、人々は車と車の間を注意して横断していくそうです。また、彼女たちは朝に入浴するのがふつうだそうです。私はおどろきました。なにしろ、自分が今まで常識だと思っていたことが、百八十度転換しているのですから。〝所変われば品変わる〟まさに、このとおりだと思います。

しかし、ここで「この人は私と違う。」といって、さけてはいけないと思います。こういう時こそ、少しでも相手の国

ついての理解を深め、相手の立場にたって物事を考えることが必要でしょう。それは難しいことではないと思います。いくら生活習慣などが違っていても、私達一人一人は同じ人間なのですから。何のかわりもないのですから。

とはいっても、私達はアメリカなど先進国の習慣は生活にとりいれようとしますが、途上国の習慣は聞き流してしまうか、悪い時には、おかしいとさえ思ってしまいます。このよう考え方は少しずつでも変わっていってほしいものです。

そして、私は彼女が日本を去った後、途上国と呼ばれている国々に興味をもち始めていきました。そして、私は宮城県青少年の翼に参加し、フィリピンに研修に行ってきました。

フィリピンでの深刻な問題は失業問題だそうです。失業者はスラム街と呼ばれる場所に木や葉を集めてできた小屋のような所に住んでいました。そこで、私はすさまじい光景を見たのです。たくさんの子供をつれてゴミ箱をあさっている女の人、停車中の車にかけより、中に乗っている人に物欲しそうに手をだしてくる子供たち。そして、彼らは私の存在に気づくと、何かを訴えているかのように私の目をじっと見て手をだしてくるのです。私は一瞬、彼らの目に吸いこまれていくような気がしました。そして次の瞬間、ふと中学生のころに読んだ、第二次世界大戦直後の日本を描いた本を思い出し、私は複雑な気持ちになりました。

現在日本では、いろいろな途上国に食料や薬などを支給しているようですが、私は仕事を与えるべきだと思います。食料はやがて食べ終わる。そしてまた、人々は次の配給を待つ。これでは、いつまでたっても同じことのくり返しではないでしょうか。私はあのスラム街で暮らす人々にも、働くことの喜びを感じてほしいと思っています。なんとかならないでしょうか。

これに対して、私がホームスティさせていただいた家庭は、大変、裕福でした。家にはメイドさんがいましたし、まるで公園のような広い庭には、プールやパーティ用のホールまであるのです。私は、この貧富の差の大きさにはおどろかされました。

また、明るく友好的なフィリピンの人々の人柄を象徴するかのように、パーティがさかんに催されました。その中でも、最も印象深いのは〝さよならパーティ〟です。「WE ARE THE WORLD」をみんなで泣きながら合唱した時には、国境を

越えたこのすばらしい友情に感動し、そして私は、「今ここに生きているんだ。」と感じたのです。

私は一つの小さな入口をくぐり、いろいろな人と出会い、そして、さまざまなことを学びました。これからも、私はこの入口から続く道を、さまざまな国の人々と共に、歩んでいきたいと思います。

途上国 — 多くの問題をかかえている国々です。今、先進国の援助を必要としているのです。

あなたは、まだ、目をそらしているのですか。途上国と呼ばれている国々から

【佳作】

おんなじ未来

宮城県仙台南高等学校　三年　吉田二郎

先日、私は一人で仙台の歩行者天国を歩いていた。日曜ということもあって、かなりの人出である。交差点に差し掛かると、一人の男が私の目の前まで擦り寄って来て、こう行った。「すみません、募金お願いします。」

私は、正直いって、内心ムッとした。募金という行為に腹を立てた訳ではない。あまりのぶしつけな態度に反感を覚えたのである。「すいません、募金お願いします。」男は繰り返した。私の胸には〝アフリカの子供達へ愛の手を〟と書かれた募金箱が押しつけられたまま……

私には、仙台市の身障者養護施設「萩の郷福寿苑」で車イス生活を送っている友人がいる。その友人と一緒に、ある日、あるラジオ番組のファンの集いへ行った帰りのことである。私達は皆、上機嫌で帰途についた。私の手にはクイズで当たった景品の電気スタンドが一つ。萩の郷に着き、友人の部屋へ向い、私は、何気なくこの電気スタンドを友人に差し出した。「ねえ、このスタンド、ここで使ってくれないかな。」その瞬間、彼は困ったような顔つきになり、「いい、いい。」と口走った。

「しまった。」そう思った時は既に遅かった。口ではえらそうなことをいっていても、結局は車イスでしか動けなくてかわいそう、という同情の気持ちでしかなかったのである……。

夕食時のテレビのニュース。そこに映し出されるアフリカの子供達のやせ細った体。私達を見つめる二つの瞳がやけに目立つ、ほとんど骨と皮だけの体。発展途上国、とくにその日の食料もない貧しい国に対しても、これと同じことがいえるのではないだろうか。人間には母性本能というものがある。弱いものを守ってあげたい、優しく包んであげたい。その想いが根となって、ボランティアの心が芽ばえるのだろう。テレビの、あのアフリカの子供達の姿を見て、こういう心が沸かぬはずがない。しかし、果たしてこの思いが、本当に相手の為になっているのだろうか。きつい言い方とは思うが、答えは否である。同情心や哀みの心は、自分の心は満たすことができても、相手の心を満たすことはできない。既にその時点で、相手を一人の人間として認めていないのである。

黒柳徹子さんが、ユニセフの親善大使としてアフリカを訪れたのは、つい最近のことである。彼女のおしゃれ好きは、定評のある所であるが、彼女がアフリカを訪れた時も、いつもと変わらぬ美しいファッションドレスに、身を包んでいた。しかし、どうであろう。このやせ細った子供達は、みな笑みを浮かべて彼女の所に集まってきたというではないか！そうだ。彼らが今、私達に望んでいるのは、同じ地球に住む人間として、友達として、対等につきあってあげることなのではないだろうか。どんなに貧しい人々であれ、どんなに不幸な生活を余儀なくされている人々であれ、私達と同じ一つの命なのだ。彼ら一人一人に、私達と同じ大きさの未来がある。その未来へ向けて、共に歩んでいくために助け合っていくことこそが、真の国際理解なのではないだろうか。

誰かがいったよ
きれいごとじゃだめだって
地球が一つになることができないって
でもさ
地球って一つの星なんだよ
そこにいる人間は

手が六本あったり
口から火を吹いたりする訳じゃない
ちょっと喋る言葉が違ったり
ちょっと目や髪の色が違うだけのこと
同じ人間なんだもの
必ず
分かりあえるはずだよ
地球が
本当の意味で一つになれたら
私は青い空の下で夢を見た

【佳作】

途上国とのふれあい

東京都立狛江高等学校　三年　谷口　真奈美

「不要となった老眼鏡をスリランカの人々に送ろう。」

これは、今年の春、ある新聞社が呼びかけたものです。

スリランカでは、老眼鏡は高価で買えない人が多く、せめて私達が使ったものでも役立つのなら…と始まったのです。

なぜスリランカへなのでしょうか。

今までスリランカの人々は快く、彼らの眼球（角膜）を私達日本人に提供してくれ、そのおかげで約千人の日本人が光を得たそうです。そのお礼に、老眼鏡を送ることになったのです。それは、お金でもよかったのかもしれません。誰でも、どの国でも、お金の方がいろいろと使い道があるように思われます。ましてスリランカは、日本を始め世界各国から政府開発援助（ＯＤＡ）を四億ドル相当受取している国だそうです。しかし、人に物をあげる、援助するということは、非常に難しいことだと思います。相手の立場を考えなくてはなりません。時には、相手を傷つけるかもしれません。そしてお金では得られない、大切なものも数多くあるのです。

なぜスリランカの人々が日本人に角膜を提供し始めたのか、私にはわかりません。宗教的なことからか、彼らの国民性か、または人間愛からなのでしょうか。いずれにしても、物質的に恵まれ過ぎている日本人が忘れている心を、このスリランカ

の人々の行為が教えてくれているのではないでしょうか。

最近、スリランカの角膜提供の数は減ってきていると聞きました。それは日本に四十一のアイバンクができ、日本人提供者が増えてきたのかもしれません。また、スリランカの人々が私達日本人に疑問を持ち始め、提供しようとする気持ちがなくなったのかもしれません。人口一五六一万人余りのスリランカとその約七・六倍の一億二千万人の日本。そして今、日本は世界の先進国の一つであり生活も彼らに比べたら裕福でしょう。いろいろな技術も目覚ましく発達しています。そんな国の国民がなぜ他の国に角膜提供を頼っているのだろうと、疑問に思われても不思議ではないのです。

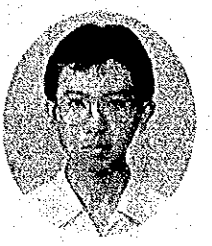
日本人はアフリカ飢餓のニュースが報道されたとき、わっとそれに飛びつき、寄付をし、また報道され…まるで一種のブームのようでした。寄付をすればアフリカが救われると思い込み、そして私たちはまるで救ったかのように錯覚してしまうのではないでしょうか。ただ寄付をするだけでなく、何が原因で、どうすればよいのかを私たち一人一人が考え、温かい、そして豊かな心を持たなくては何も進歩せず、解決されないと思います。それと同じように、私達は自国へも目を向け、今何が必要とされているのかを考え、できるだけのことを一人一人が協力することを心がけなければならないのです。他人に頼ってばかりいるのでなく、まず自分がしっかりとするべきです。

角膜提供ということに以前から関心があり、私もアイバンクに登録してあります。それゆえにスリランカの記事を読んだとき、私の思いと一つになってふれあいを感じたのです。これからも少しでも多くの盲人が光を得られるように、心から願っています。

日本人が他人を心から思いやり、押しつけではなく、また同情心ばかりではなく、いま自分が他の人に何をしてあげられるかを考えて一つの小さな善意でも実らせてゆきたいとおもいます。

最後に、これから私たちの時代には、何事にも他国のあとに続くのではなく、率先してどんどんリーダーシップをとりたいと思います。そして途上国に対して優位にかまえるのではなく、先進国と途上国がふれあい、理解しあってこそ、素晴らしい世界がうまれるのだと思うのです。

【佳作】



南北問題と日本

兵庫県立武庫壮高等学校　三年　細包（はそかね）　剛

方位を表す言葉の中に「南」と「北」というものがある。しかし、この「南」と「北」、時に、国語辞典には載っていない意味をもつことがある。

「南北問題」。テレビやラジオのニュースで、よく耳にする言葉である。ここで言う「南」、「北」とは、何を意味するのであろうか。「南北問題」とは、一体どのようなものなのだろうか。

高校の現代社会の授業で、「南北問題」を学習したことがある。授業の内容は、あまり覚えていないが、なぜかモノカルチュアという言葉だけが、はっきりと頭にこびりついて離れなかった。

「モノカルチュア」とは、特定の農産物の栽培に依存する経済、と辞典にある。発展途上国では植民地時代に、プランテーション農業が広がった。途上国を植民地として支配していた欧米の列強諸国は、自給自足の生活をしていた途上国に輸出作物をもちこんだ。途上国の豊かな大地は、次々とコーヒーやカカオ、天然ゴムなどの畑へと変わっていった。列強諸国の利益のためにのみ、栽培が始められた輸出作物は、発展途上国が外貨をかせぐ重要な手段として、現在も積極的に栽培されている。僕は、輸出作物の一つであるバナナについて調べてみた。

日本に入って来るバナナの九十パーセント余りはフィリピン産である。ところがフィリピン産バナナが日本に輸入される

ようになってから、まだ十七、八年しかたっていない。

ミンダナオ島、それがフィリピンバナナの産地である。ミンダナオ島には、大規模なバナナ農園がいくつかあり、その周辺の農家でもバナナを栽培している。ミンダナオ島ではそれまで、米やココナツ、野菜などが栽培され、農家の人々は、自給自足の生活を送っていた。ところが、一九六十年代に入って日本のバナナ消費量が激増したために、新たなバナナ生産地として、ミンダナオ島が急速にうかび上がった。アメリカや日本の企業は、ミンダナオ島に次々と大規模なバナナ農園をつくり、そして島の農家も次々とバナナ栽培を始めた。

現在日本では国民一人あたり年間約四十本の割でバナナが消費されている。しかし、これだけのバナナが輸入されているにもかかわらず、ミンダナオ島のバナナ栽培農家は、潤うどころか、多額の借金をかかえ、一日の食費にもこと欠いている。なぜこのようなことになってしまったのだろうか。

人間とは、実に勝手なものである。一九六十年代には、「バナナは必ず儲かる」といわれ、日本の輸入業者は、バナナを競って輸入したが、一時は国民一人あたりの年間消費量が六十本を越えたほどの勢いだったバナナは、その後、オレンジやグレープフルーツ、キウイなどの珍しい果物に押されて、輸入量は下降線をたどった。ミンダナオ島でバナナ栽培が始まってしばらくたつと、バナナブームはどこへもなく去ってしまったのである。そのためバナナ生産は過剰となり、需給のバランスがくずれ、バナナは大幅に値下がりした。その上、石油ショックで農薬は天井知らずの高騰を続け、バナナ栽培農家は、にっちもさっさもいかなくなってしまった。バナナ畑をもとの米や野菜などの畑にもどすには金がいる。すでに多額の借金をかかえた栽培農家が、その金を工面できる訳はなく、どうすることもできずに仕方なくバナナ栽培を続けている。栽培農家の借金は、今、こうしている間にも膨らみ続けているのである。

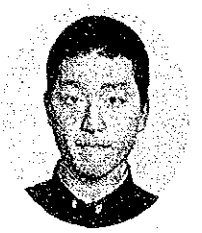
僕達はこのような栽培農家の窮状をバナナ需要の天井を見極められなかった彼らの自業自得と言って片付けてしまってよいのだろうか。彼らは、「バナナは儲かる」というアメリカや日本の企業の口車にのせられて、自分達では食べることのないバナナをつくり始めたのだ。

南北問題の根本は、先進国の繁栄が、発展途上国の犠牲の上に成り立っているということである。僕はバナナについてとり上げてみたが、これはバナナだけの問題ではない。バナナの問題は、北と南のゆがんだ関係の中の氷山の一角にすぎないのである。

戦後四十年、日本は世界でも有数の富める国の一つとなった。たしかにこれは、日本国民の努力の結果である。しかし、それだけでここまで発展することができたのであろうか。

日本は、食料やエネルギーの大部分を海外からの輸入に頼っている。現在の日本のこの豊さは世界の人々によって支えられているのである。日本が自国のことだけを考えていればいい時代は終わった。経済大国となった日本は、これからは世界の繁栄のために貢献しなければならないのではないだろうか。資源の乏しい国、日本。世界の繁栄があってこそ、この僕達の国の繁栄があるのだから。

【佳作】



開発途上国と私

愛媛県立松山商業高等学校　三年　影浦浩二

現在、日本は機械文明、高度経済成長などにより世界でも有数の先進国となっている。確かに、戦後の発展には著しいものがあった。しかし、それは日本が独力で成しえたものではなく、開発途上国の大きな犠牲の上に立った繁栄ではなかったのだろうか。例えば、途上国の地下資源や森林資源がなくては、わが国の高度経済成長はあり得なかったし、その森林の乱伐や先進工業地帯の排ガスが地球規模の気象変化をもたらし、アフリカの砂漠化の遠因になっているという。今、先進国のつけがまわって、貧困と飢餓に苦しんでいる途上国を救うのは日本を含めた先進国の義務なのではないだろうか。

しかし、援助と一口に言っても、何をどのように援助するかが問題である。今、途上国にとって何が一番必要なのか。それは一率には言えないと思う。それぞれの国によって、実情は異なるだろう。これに関して、某新聞にこういうことが書いてあった。

「与える方は義務であり、受け取る方に選択の自由がある。援助をするには、途上国を、途上国の文化を知ることが大切である。」

一例を挙げると、エチオピアの場合、たいへんな食料難のため多くの人が餓死したと言う。当然、日本を含めた先進国は食料物資を数多く援助した。しかし、それだけでよかったのだろうか。テレビで、港に山積みされた食料物資が放置されて腐っ

てゆく光景を見た。どの国も、飢餓から食料援助を思いつくが、それを奥地まで運ぶトラックを贈ろうとする国はなかったのである。この例は、余った物資を送りさえすればよいという先進国の精神の貧しさをはしなくも暴露している。途上国の実情やそこに住む人々の気持ちを知ろうとしない援助は、自己満足のための援助、援助のための援助と言われても仕方ないだろう。本当に必要な援助とは、エチオピアが自立した生活ができるようにすることではないのだろうか。例えば、昨年の干ばつの時ナイル川には水があふれるほど流れていたと言う。しかし、水を引くための用水路がなかった。ここで用水路を引く事こそ本当に必要なことなのだろう。用水路だけではない、その土地に合った作物を作れるように品種改良も必要だろう。そして、生活をして行くための技術も必要だろう。次の世代を担う子供たちの教育もかかすことはできない。いずれにしろ最終的には、エチオピアが自立した生活ができるようにすることこそ本当に必要な援助と言えるのではないだろうか。先の新聞の続きにこうある。「援助する人々はなぜ、現地で活動する自分の姿を発表したがるのかと援助される側は言う。援助は自分が有名になるためかという冷やかな見方もある。」

我々日本人も、他国の事は言えない。はっきり言うと、日本の援助には裏がある。例えばインドネシア。精一杯の援助をしたとしても、つねにみかえりを計算している。石油のない日本にはうってつけの途上国であったわけである。先に述べたように援助する事は、先進国である日本としては当然な事である。しかし、本当の援助というものは、損得を抜きにした心からのものでなければならない。損をする覚悟で、今まで途上国の犠牲により蓄えた豊かさを途上国に分け与えるべきだと思う。そして、この「豊かさの還元」によって、また世界もよりいっそう幸福になるにちがいない。途上国の幸福なくして、世界の幸福はありえないのだから。

先日、こんな記事を見つけた。海外協力隊員が若干二十六歳で、派遣先のケニアの中学校の校長に就任したと言う。日本の青年海外協力隊は世界的にも高い評価を受けていると聞くが、紙上の青年の笑顔の裏には、評価を受けるにふさわしい苦労があったにちがいない。私は、この記事を読んで快い衝撃を受けた。それは、自分とあまり年令差のない若者の、さわやかで充実した生き方を発見した喜びであり、同時に自分にも大きな可能性を感じたからである。自分は今商業高校に通って

いるが、こんな自分でも途上国の商業面において少しは役に立てるかもしれないと思ったのだ。もちろん、今すぐにではない。あの青年も大学院生と聞く。だから、今後大学に進学して、少なくとも人に教えられるような学問なり技術なりを身につけてから私も是非、海外青年協力隊に参加したい。そして、現地の人と苦労を共にしながらそこに、小さな商業の種でもいいから残したい。たまには、現地の子供たちに私の大好きな野球を教えながら。

【佳作】

僕たちみんな地球人

高松第一高等学校　二年　北谷　光

宇宙の中の一つの星。その星は青くて丸いきれいな星。その名も宇宙船「地球号」。その地球号には生物の一つとして人間がいます。人間といってもたくさんいます。黄色人種や白色人種、黒色人種などいろんな人種の人間が地球号で生活をしています。みんなみんな同じ宇宙船「地球号」に乗っています。そしてみんなみんな「地球人」。

僕もその地球号の乗組員の一人です。僕の住んでいる国、日本。今、日本は世界から多くの注目を浴びています。その日本は、歴史上から見て、激動の歳月を重ねています。その一つに戦後、「高度経済成長期」という時を経ています。技術的にも産業的にもたいへん飛躍した時でした。そして今や日本は、「経済大国日本」と謳われるようになりました。それは日本に住んでいる一国民として、たいへん喜ばなくてはなりません。

しかし、何か人々は大切なことを忘れがちではないでしょうか。それは日常の目まぐるしい生活に流されつつあるのではないでしょうか。「協力の心」「助け合う心」これらを果たしてみんな十分に持っているでしょうか。日本は「高度経済成長期」を経ましたが、「心の高度成長期」を経ているでしょうか。また、「経済大国日本」と謳われていますが「心豊かな国日本」と謳われているでしょうか。あまり言えないと思います。

今、日本は「飽食の時代」と言われています。お金さえあれば何でも買える時代です。自由にいろんな食べ物が食べられ

ますが、嫌いな物は残され、いとも簡単に捨てられています。また、健康や肥満をたいへん気にしてお金をかけてやせようとしています。飽食の時代を気ままに満喫して、一方ではお金をかけてやせようとしている。しかし、世界の中には、飢餓に喘いでいる人々がたくさんいます。そして、毎日「死」と直面して必死に闘っている人々がいます。何か変だと思いませんか。同じ地球号で生活をしているとは、とても信じられません。

日本はそういった「開発途上国」に対して先進国として援助をしています。しかし、その大部分がお金や物品的援助です。他の先進国で重視されている人的派遣援助が、日本では非常に少ないのが現状です。そのため、よく諸先進国から、「日本はお金や物品的援助ばかりして、大切な人的援助をあまりしない。お金や物品を援助すれば済むと思っているのだろうか。」とよく批判されている、ということをどこかで聞いたことがあります。

また、僕の通っている高校にある一人の女性の身体障害者の方が来て、講演をしました。その講演の中で、「私は年一回、夏にテレビを通じての募金活動や助け合い運動は嫌いです。あのようなお祭り的にやるのは、ほんとうの助け合いにならない。やるのなら、年間を通じて、真の募金活動や助け合い運動をして欲しい。」と言っていました。僕はこの話が強く印象に残っています。僕も以前、よくテレビに扇動されて、その日が来ると急に募金をしたり、助け合い運動に参加したりしていました。しかし、それが過ぎると何事もなかったように過ごし、たった一時の協力で自分は良いことをしたと自己満足していました。こういった感情や行動が他の人々にも多かれ少なかれ見られるのではないでしょうか。

僕はテレビを通じての募金活動や助け合い運動を批判しているのではなく、もっとそれに正しい認識を踏まえて参加しなければならないということを言いたかったのです。

開発途上国に対して、お金や物品的援助をするのも大切ですが、ただそれを援助するだけでは、途上国に住んでいる人々が援助だけを頼りにして、自分たちで少しでも努力して生活をしていこうという「自立心」を失わせるだけです。そのためにも人的派遣援助によって、日本の優れた農耕技術や工業技術を伝えいかなければならないのではないでしょうか。そして開発途上国の人々と共に生活し、技術を教えることによって協力し、助け合っていく必要があると思います。また、人と人

との「心のふれあい」によってかけがえのない大切なものを、お互いに発見できるのではないでしょうか。

「教えることは学ぶことです。」と言われるように、人的援助をする中に途上国から学ぶべきものが多く得られると思います。

日本でもこの人的派遣援助を多くしていくためにも、そういった人材を養成する施設を作ればいいと思います。また、僕達中高生が途上国に対して興味や関心を持たせてくれるような資料館などを作って欲しいと思います。

お互いに協力し、助け合って生活の向上を目指そうではありませんか。そして世界平和を共に切望しようではありませんか。なぜなら、僕達みんなみんな地球人なんだもの。

【佳作】

まず身近な所から

福岡県立浮羽東高等学校　三年　柳　多美子

新聞等で、私はよく青年海外協力隊の記事を目にします。東南アジア、アフリカ、南米等、いわゆる開発途上国と言われる国で、その人々と共に一生懸命に働いている、私達と同じ日本の人々の姿です。生活習慣、言語、文化の違う国での生活は決して容易なものではないと思われますが、そんな中で頑張っている協力隊員の姿は私達日本人にとっても、誇らしく思えます。とかく日本の海外援助の有り方は、諸外国から手厳しく批判されています。アジアの一員でありながら、難民に対してあまりにも冷たいとか、救援救護において消極的、金さえ出せば責任を果せるのかとか、決して喜ばしいものではありません。しかし、日本国内には「一杯のスプーン」という運動や「緑一本運動」、「世界の子供と手をつなぐ会」などといった多くの事業団体が存在し、ボランティア組織もあります。先程の青年海外協力隊の人々の社会への貢献は、目を見はるものがあります。しかしそれでもなお、日本の援助の有り方が問われるというのは、やはり日本人全般の考え方、受けとめ方に問題があるように思います。

開発途上国。同じ地球上に位置しながらも、新聞雑誌、テレビ等でその危機を報道されても、私達日本人は他人事、自分とは無関係と捉えがちです。また関心を抱いても、積極的にボランティアへ参加しようと思う人々は、その中のわずかであるといいます。私達の日本は単一国家、島国であるが故に物の考え方、見方というものが閉鎖的なのではないかと私は思い

ます。

今、地球の南北問題は、国際社会の大きな問題として重要視されています。全世界の¼である私達先進国が、全収入の⅔を得、七〇％もの食物を消費し、全ての人々が中等教育を受けているのに対し、開発途上国の人々は全人口の¾を占めるにもかかわらず、食物はわずか三〇％、初等教育さえ受けられれば良い方という状態です。そして五歳以下の子供達は病・栄養失調・飢えなどでその¼が死んでゆくというのです。それも一時間に千五百人の割合で……。今の先進国社会にどっぷりつかっている私達には、それは想像を絶する状態です。現在の状況はあまりにも不均衡で、誰が見ても、このままで良いとは思えないはずです。一刻も早く、事態を明るい方向へ転換させなければなりません

ここで私達が考えなければならないのは、援助の有り方だと思います。私達日本人は昔から、資源のないわずかな土地で生活してきました。私達は本来、他のどの国よりも譲り合い、助け合い、支え合う心を基本的に持っているのではないかと思います。ですから、いわゆる技術提供ばかりでなく、心からの国際交流を企りながら援助の手を差しのべるというのが最良であると思います。民族の枠を超えて互いに信頼関係を結ぶのは、これからの時代、最も大切だと思います。

そして私達青少年は今、何をしなければならないのか。それはまず何よりも国際的視野を広げる事にあると思います。現在の青少年、いえ日本人の視野は、自分の周囲には注意深くとも、それ以上ともなるとあまりにも無関心です。これからは国際化の時代、私達一人一人が国際人である意識を持たなければなりません。そして自分にできる、世界の人々へのボランティアを常に考え、行動に移してゆくべきだと思います。〝ボランティア〟という言葉は、本来「自発性」という意味を持っています。自発的に社会に貢献する事は決して難かしい事ではありません。私自身規模は小さいのですが、地元の奉仕活動に参加しています。老人ホーム訪問、身障者の人々と共にキャンプ、青少年健全育成の為の行事参加…。確かに社会を見る事によって視野が広がってゆきます。私達青少年は全世界の人々が、平和で、共に幸せに生きるという事を広く捉え、他人事でなく自分自身の事として理解し、認識し、実行しなければならないと思います。何故ならば、私達はこれからの時代変革の大きな力を持っていると考えるからです。私達の回りには、手軽に参加できるボランティアが沢山あります。「愛の古

切手」など、その身近な例ではないでしょうか。このような身近なものに積極的に参加していく事が、世界単位のボランティアへと広がって行く事になるのだと思います。

そうする事によって、先日行われた東京サミットでの宣言「南の繁栄なくして北の繁栄なし」の主旨も真の意味で実現されていくのではないかと私は考えます。

【佳作】

果てしない砂漠を共に

川内純心女子高等学校　一年　溝川靖乃

今春、高校に合格するまで、私は新聞配達を続けてきました。日本の中央部から遠く離れた鹿児島県の更に山村とはいえ、町のどの家々も安らかな生計を営んでいます。さまざまな季節の香りがする畦道を縫うようにして早朝の冷気の中を配達して回ることは、とても楽しいことでした。配達で得たお金で、好きなものを買うことも大きな喜びです。しかし、新聞配達をする喜びは、何にもまして、世界や日本の、そして地域のニュースを各家に届ける使命感です。

日々配達する新聞の記事の中には、ほのぼのとするニュースもありますが、嫌な記事も多いものです。

配達しながら悲しかったことは、アフリカの飢えに苦しんでいる子供の写真を目にしたときのことです。悲惨、としか言いようのない状況でした。やせ細った手足、頭蓋骨に目をはめこんだだけのような顔――。数葉の写真は、発展途上の国というよりは、全く発展がないのではないかとさえ思わされました。

国際協力事業団の資料によると、現在国際連合に加盟している国の数は一五九カ国で、そのうち、一二八カ国が開発途上国で、国の数では世界の八〇％、人口では四分の三を占めているのです。そしてその多くの国々の人々が今なお飢えと貧困に苦しんでいるのです。

わが国の児童憲章の中には「すべての児童は、心身ともに健やかに生まれ、育てられ、その生活を保障される。」と述べ

られています。私達は幸せです。憲章の中の言葉を使うと、日本の若者の一人びとりが、「生活を保障され」、「十分に整った教育施設」の中で「健やかに育ち」、「よい国民として人類の平和と文化に貢献するようにみちびかれ」ているのです。

このような日本の青少年がいる一方、学ぶことはおろか、その日の糧を確保することさえ困難で、生きのびることさえ危ぶまれる状況の中にいる児童が多いということは悲しいことです。

果てしない砂漠を歩む旅人は、遠い地平線を見つめながら歩む。だが歩いても歩いても地平線は近づかず、むしろ遠のいているようにすら思われる、といいます。開発途上国の開発は、この地平線のようなものである、と言っている人がいます。独立から十年たち、二十年経っても、当初の目標は程遠く、先進諸国との格差は広がる一方だからです。一人当たりの国民所得が伸びるどころか減退していく国さえ多いのです。豊かな天然資源に恵まれながら、その発展の可能性さえ、引き出すことができないのです。干ばつ、飢餓、対外債務の重圧、急速に膨張する人口、更には内戦等々どれをも解決することすらできないでいるのです。

勿論、これらの貧しい国々への諸々の形での援助を日本は行ってきました。一九八四年の経済協力実績は、ＧＮＰの一％という目標は達成されていないものの、総額一六〇・五億ドルで、アメリカに次ぐ実績をあげています。

更に近年、特にアフリカに焦点があてられ、難民救済のためのチャリティショーが開かれ多くの人々の善意が救援物資という形で送られたのはよいことでした。しかし、日本国民の善意は一次のブームで終わってはならないのです。食糧危機だから食糧を送る。死亡率が高いから医薬品を送る。文盲の人が多いから学校の建物を造るだけでは、開発途上国は永遠に途上国であり続けるのではないでしょうか。

開発途上国も先進国からの援助のみを頼りにするのではなく、依存体質を捨て、自助努力をすべきです。また、先進国も、飢餓に苦しむ人々が食糧を自給し、自立することができる援助へと質を転換すべきときにきているのではないでしょうか。一例をあげると収穫量の多い極度に集約化された日本の農業技術を教えることが、自助・自立へとつながるのではないでしょうか。

確かに、青年海外協力隊員などの地道な活動が徐々に成果をあげているのも否めない事実ですが、更に一層充実させることが必要です。

豊かさと繁栄は一部の人々が享受すればよいわけではありません。人類全てと共にしなければならない、と思うのです。

開発途上国の繁栄が地平線のかなたにあり、歩んでも歩んでも、その地平線が遠のくようであってはならないのです。

繁栄と発展のはるかかなたの地平線をめざして、一人歩むのはつらいことです。励まし話し合いながら歩む友がいると、そのつらさは半減します。飢餓と貧困の果てしない砂漠をあてもなく歩んでいる途上国の人々の、よきパートナーとなるのが今の日本の若者の使命だと私は思います。

開発途上国の人々と共に歩む心を私は持ち続け、二十一世紀は豊さを共にする世紀にしたいと願っています。

【佳作】

「真の友」として

沖縄県立嘉手納高等学校　三年　町田宗和

「発展途上国という言葉の意味を説明できますか。」と、いう質問にあなたはどう答えますか。

いろいろな事が頭に浮かぶでしょう。しかし、それだけで「発展途上国」の説明は十分にできますか。

僕は「発展途上国」という言葉に、「劣った国」という先入観がありました。発展途上国――一般に人口一人当りの所得水準が特に低く、産業別就業人口の構成で農業の比重が工業のそれより圧倒的に多い国で具体的には、東南アジア、南アジア、西アジア（中近東）、アフリカ、中南米の諸国をさし、現在、世界の国々の中の一二〇カ国、約八〇％の国々が発展途上国と呼ばれ、別名「第三世界」ともいうその国のほとんどが二〇世紀半ばまでの長い間、植民地として先進資本主義国の支配を受けてきたため、開発の遅れてきた国々である。

辞典を調べるとこのような解説が書かれていました。

そして、教育問題、貧弱な土地、飢餓、非文明的な生活等が途上国の抱える問題となっています。

その事が、僕の発展途上国に対する先入観となって、途上国を「劣った国」という見方にもっていってしまったのです。

今日、多くの人が「外国」と聞くと、欧米の方を真先に思い浮かべるのも途上国を「劣った国」と見て「外国」＝優った欧米と見てしまうからではないでしょうか。

例えば、アジアは僕達の生活の中に深く溶け込み、アジアとの密接な関係の上に僕達の豊かな暮しは成り立っているのに、僕達は欧米の国々にだけ関心を示して、アジアに生きる人々の暮しや考え方、文化を十分に理解しているとはいえません。

日本は、四〇年前の焼け野ヶ原から高度経済成長を経て先進国の仲間入りをし貧しかった時代から今は、飽食の時代とまで呼ばれるようになりました。

複雑な歴史を様々な文化を持つ途上国を見るのに、日本が達成した科学技術や経済の発展を、また、政治制度や生活様式を僕達は無意識のうちに唯一の価値基準としてあてはめていないでしょうか。

これは、日本国民が単一民族で成り立ち、すべての価値基準が同じであるということから来たのかもしれません。

ある人を友として迎える時、その人の事をよく理解した上で付き合わないとそれは上辺だけの友となり、真の友となることはできません。

このことは、国際社会における先進国と発展途上国との関係にも言えるのではないでしょうか。

先進国は、発展途上国へ対して物資、金銭技術の援助を行っています。そして日本は、技術、教育、衛生面での援助や資金の援助を行い一九七八年には、ヨーロッパ、アメリカについで援助額の多い国となりました。

しかし、「発展途上国への援助はお金をたくさん送ればいい。」というものではないとぼくは思います。

最近、帰国された青年海外協力隊の方が、「単なる物資や金銭の援助だけでは人間をだめにし、途上国の人々は援助慣れの一面もあり、ただの物は粗末にする。」と、援助について報告された記事が新聞に掲載されていました。

それでは、真の援助とはどういうことでしょう。

僕の考えはこうです。真の援助とは、あらゆる先入観を捨て、途上国を理解した真の友としての援助、つまり、「親が子供の高さになって話しをすると子供の立場がよくわかる」のと同じように、先進国も「発展途上国の目で発展途上国を見た援助」が必要ではないだろうか、と思うのです。

一つの援助を成し遂げるにも、金銭ですぐに解決できる事業もあえてそういうことをせずにその国の自立を目指し、先進

国から人々を派遣して、年月はかかるかもしれないが途上国の人々に技術を身につけてもらう事によってその国の発展を援助するという方法が、国と国との相互理解、国際交流に役立つのではないでしょうか。

その意味で、青年海外協力隊は最も重要な援助の一つです。

僕も社会に出たら可能性への挑戦と発展途上国を理解し、途上国の人々との友好を深めるためにも発展途上国の力になりたいと思います。

そして、最も大切なのは国民の一人一人が発展途上国に目を向け、現在の世界の八〇％の国々が一国、また一国と「発展途上国」から脱却するのを「真の友」として導いてあげることです。

【学校賞及び奨励賞受賞校】

学校賞受賞校（応募数）

福岡県立香住丘高等学校（六二九点）

学校法人熊見学園神戸女子商業高等学校（四八二点）

東京都立狛江高等学校（三〇五点）

岩手県立花巻農業高等学校（二〇五点）

長野県南安曇農業高等学校（一三〇点）

岩手県立北上農業高等学校（一〇八点）

奨励賞受賞校（応募数）

宮城県多賀城高等学校（九一点）

熊本県立蘇陽高等学校（六七点）

学校法人聖和女子学院（六四点）

水口女子専門学校（四六点）

三重県立久居高等学校（四五点）

福島県立東白川農商高等学校（三六点）

三重県立宇治山田商業高等学校（三〇点）

兵庫県立西宮甲山高等学校（三〇点）

二、特選・準特選及び審査員特別賞受賞者の研修旅行

≪特選ー南米≫

7月25日		東京発
26日～	27日	リオ・デ・ジャネイロ（ブラジル）
27日～	30日	サン・パウロ（ブラジル）
30日～	31日	イグアス（パラグァイ）
31日～8月4日		アスンシオン（パラグァイ）
8月5日～	7日	リマ（ペルー）
	8日	東京着

アスンシオン；中央食品卸売市場改善プロジェクトにて

≪準特選ー東南アジア≫

ジャカルタ；職業訓練指導員・小規模工業普及員養成センタープロジェクトにて

7月25日		東京発
25日～	29日	ジャカルタ（インドネシア）
29日～8月2日		バンコック（タイ）
	2日	東京着

≪審査員特別賞ー沖縄≫

7月25日		東京発
25日～26日		沖縄
	27日	東京着

沖縄国際センターにて

南米研修旅行を終えて

静岡県立磐田農業高等学校　二年　鈴木宏尚

長いと思って出掛けた、二週間の南米研修旅行も、見るもの聞くもの全て、興味深く、初めての経験の連続で、とても短く感じられました。

私が旅行に出る前に思い浮かべていた、発展途上国のイメージは、周囲が全て荒れ果てた大地で、限りない広がりを見せ、そこにある、簡単な粗末な木の小屋の住居に、貧しい人々が、住んでいるという状況でした。ところが、この南米研修旅行の途中で、一番強く感じたことは、「ここ南米は本当に発展途上国なのだろうか」と疑問を抱いたことでした。近代的な建物が立ち並び、発展途上国離れした光景が、広がっていましたし、道路も良く舗装されて車の交通量もかなりのものでした。時々、子供達が、車のフロントガラス拭きや路上でのみかん売り、靴磨き、新聞売りなどで、お金を稼いだり、またはただでお金をねだりに車窓へ顔を寄せて来る姿が見受けられました。これは日本ではほとんど見受けられない光景ですが、先進国の諸外国でも普通に見られるものと思いました。また、ファベーラと呼ばれる簡単な木の板で作られた、マッチ箱のような、家々の集まる貧民部落が、山の傾斜の部分にありましたが、それを見てやっと発展途上国らしさを見出すことが出来たと思いました。しかし、そこから見える景色は、やはり近代的な建物なのです。ファベーラも先進国にある、スラム街とあまり変わらないように思いました。

ペルーでは砂漠の中に貧民部落が、かなり広範囲に広がっているのを見ることが出来ました。

後に思ったことですが、私の見てき来たところは、都市中心だったので、あまり発展途上国らしいところは、見られなかっ

たのだと思いました。

それにしても国際協力事業団の各地での活躍には目を見張るものがありました。

イグアスの滝、イグアスからアスンシオンへのバス旅行の車窓へ広がる景色は日本では見られないすばらしいものでした。

将来、南米ブラジルの地で牧畜を中心とした大規模な農牧畜業をと夢見ている私にとって、現地の方々から農業事情について、いろいろうかがえたことは、とても有意義でした。例えば、肉牛についてうかがったことを挙げてみますと、牧畜経営を軌道に乗せるまでには、多額の資本金が必要な関係上、なかなか大変だということです。何百ヘクタールも土地が必要の上、開墾造成費用も大変で、最初の何年間かは牛の成長期間であり収入が入らないという理由からだそうです。しかし軌道に乗せることが出来れば、一番安定していて価格変動しなく、管理も楽で、天候の影響も普通の農業に比べて少ないそうです。南米の牛はやせ牛が多く見受けられましたので、現地の専門の方々に、「最初のうちは集約的に狭い小屋の中で、牛を飼い、飼料は背の高い青刈作物を栽培したり、濃厚飼料を与え、太った良い牛を生産すれば良いのではないか」と質問してみましたら、そのような経営は、逆に設備費が、かかるのと、糞尿の処理が問題である上、高い飼料代をかけて、良い牛を造っても南米では質より量的な傾向があり、同じ安い値段でたたかれると言われました。

その点、野菜は小資本でやれますが価格変動が激しく、ばくちみたいなものだそうです。これからの農業は価格変動の情報収集やすぐには真似の出来ない技術を持つことが大切だということだそうです。

南米では一部を除いて大部分はまだまだのところがあるようで、技術が要のように思いました。

この旅行で、ブラジルへの夢は、いっそう強いものになりました。大学を卒業したら、「海外開発青年」にぜひ、参加したいと思います。そしてブラジルに渡り、三年間みっちりと、ブラジルの農牧畜業について学びたいと思います。

南米研修旅行を終えて

高知県立高知農業高等学校　二年　小田義典

私は、七月二十五日から八月八日まで、国際協力事業団の招待研修旅行で、ブラジル、パラグアイ、ペルーの三ヶ国に行くことが出来ました。出発までは夢の様に思えてなりませんでしたが、二十三日、東京行きの飛行機に乗りこんだ時は、「ああ、いよいよ、現実だ」と胸が高鳴りました。東京での受賞式は、自分にとって二度とない緊張した時でした。その後の研修は、日本は国際協力事業団を通してアフリカ、東南アジア、南米など世界各国に援助を行なっていることを詳しく知ることが出来ました。私の両親が移住していた移住地も事業団の事業の一つでした。ＴＩＣ（東京国際研修センター）には、世界各地から来た多くの研修生が、日本の技術を学んでいました。夜の交換会では、研修生と話しをしましたが言葉があまり通じなくとも、お互いの気持はわかり会えたと思います。他の高校生の英会話はすばらしく、自分の英語力がなさけなく思い、今後は勉強する決心です。しかし、何より良かったことは、受賞した仲間達と知り会えたことです、その人達も様々なきっかけから、途上国への援助の必要さを国と国と言うより、一人の地球人としての相互理解の出来る世の中になるよう願っている人達だと思いました。交換会での楽しかったことや受賞したみんなと過ごした一夜は、決して忘れません。

リオデジャネイロが最初の見学地でした。今思い出しても、とくに印象深く、大好きな所でした。それは、始めて行った私でさえすぐとけこめるような気がする程、明るい人々でした。さすが、あの有名なカーニバルのリオだなと思わずにはいられなかったです、あの陽気さ、ゆうゆうとした態度は日本ではないと思います。

サンパウロは大都会で、どこもにぎやかでした。ジャカレイ移住地で荒木さんに出会えたことで、私は一つの大きな勇気

が出きました。失敗をおそれず何事にも立ち向って自分がせいっぱいやり、失敗しても又やりなおす粘り強さをもつことです。サンパウロ郊外は、山が多く日本を思わせる感じでした。

七月三十日ホースデイグアスからイグアスの滝へ行きました。イグアスの滝は前に何度か来ていましたが小さい時と又違った思いでした。大陸的なスケールの大きさと、自然の力のすばらしさに驚かされました。家族みんなで昔来たこともなつかしく思いました。

同行の二人と別れて、私の父がねむるイグアス移住地に帰りました。イグアスに着くまでは、胸がいっぱいで昔のことを思い出していました、同級生達と父母の親しかった人が集まって出迎えてくれ、その夜はなつかしいアサード（焼肉）を食べながら昔の事を語り会いました。この夜イグアスでは私にとって友情の日でした。このすばらしき友情の日のことは一生の思い出となるでしょう。翌朝、前に住んでいた土地を見に行きました。もう再生材におおわれ、以前のおもかげはありませんでしたが、再びここに昔のおもかげをきずくことを決意しました。父の仕事を手伝っていた現地の人たちとも会いましたが、言葉がじゅうぶんにわからなくても、とても喜んでくれていることがわかりうれしく思いました。そして私の一番の願いでもある父のミサは、多くの人達が来て盛大に行なってくれました。ここで父は死んでも生きている父の人柄、大きさを知ることができました。生前父は母に、人間の値うちは死んだ時こそわかるというのが口ぐせだったそうです。私もまけずに生きて行きたいと思っています。

それから、アスンシオン、リマと見学しました。このすばらしい旅行を与えてくれたＪＩＣＡに感謝しています。

今後、自分の目標に向かって、できるだけの努力をしていくつもりです。

東南アジア研修旅行を終えて

長野県長野高等学校　二年　相澤清香

発展途上国ー高い文盲率、拡大するスラム、社会福祉の立ち遅れなどを聞くにつけて私は「どうして民衆は社会に矛盾を感じないのか。」と常日ごろ思ってきた。しかし、これが私自身の恵まれた環境から生まれた考えであることが、実際に東南アジアを訪れて分かった。

インドネシアのあちらこちらで私とそう歳がちがわないだろう少年たちが、物売りをしていた。インドネシアは義務教育制ではあるが、貧しい家庭の子供はその生計をたてるために学校をやめ、仕事をせざるをえないとお聞きした。教育をろくすっぽ受けていない青少年が自分のいる社会に矛盾を感じることができるはずがない。

生活苦のために学校へ行けない子供たちをなくすために、社会福祉制度をもっと充実させればよいと思うのだが、インドネシア政府にお金がないとなるとこれはできない。教育が受けられない青少年たちは、この先もずっと社会の底辺で生活せざるをえないだろう。では、政府にお金がないのはなぜか。これは国の産業が発達していないからだが、国はお金がないので、これに対しても何もできない。すべてがすべて、悪循環に満ちている。

この悪循環打開のために何をすればよいのか。これについて私は、他国からの無償援助というものが大きなカギになっているのに気付いた。今まで私は、日本が多額の無償援助を発展途上国にしたところで、日本に何の利益があるのかと批判的であった。しかし、発展途上国のこれからの発展のためには、これが不可欠であろうし、日本をはじめとする先進諸国の現在の姿の背後には、多からず少なからず発展途上国の犠牲があったことが分かった。

けれども、私にはまだ疑問が残る。はたして、日本はどこまで援助できるのだろうか。日本の無償援助で設立されたさまざまな施設や、日本人で技術指導をされている方々はすばらしいと思ったが、資源を豊富にもった発展途上国が日本の最先端の技術をもって日本に対抗したら、日本が負けることは明らかである。そうしたら、日本は現在の位置を退くことができるだろうか。また、現段階で考えて、発展途上国が進出する市場はあるだろうか。それから、偏見である、私は東南アジアへ行くと分かった時、大変なことになったと思った。熱帯雨林の中にある都市に行くと思ったからだ。だが、これが偏見であることは行ってみてすぐに分かった。木の代わりにビルが立ち、落ち葉が積もっているはずの大地は、アスファルトだった。このようなことは私だけでなく、多くの日本人にあるのではないだろうか。表面的なことも知らないで、どうしてその国の奥深い実状が分かるといえるだろうか。タイの防災リハビリセンターでお聞きした「タイは困った者があると村全体で助け合うのですよ。ここに、日本の福祉制度をひくことがよいのか、悪いのか分かりませんよ。」というお話しが印象的だった。

私は、今まで発展途上国について考えていたことをすべて覆されて帰国した。そして、ここには書ききれないさまざまな事を学び、考えた。また新たに出発点に立ってしまったわけだが、この新しい出発点はこれまで歩んだ道よりちょっぴり先に進んだものであって欲しいと思う。

私のみた東南アジア

和歌山県立橋本高等学校　三年　後藤多恵

マレーシアを離れてから半年もたたないうちに、また東南アジアを訪れるチャンスを得ようとは夢にも思っていませんでした。帰国後、自分の留学生活をふり返り、自分の見たマレーシアについて考えるにつけ、〝もっと東南アジアを知りたい〟そう思っていました。そして、今回の研修旅行の知らせをうけた時、これから行くインドネシアやタイがマレーシアとどう違うか、それらの国にとって日本はどういう国なのかを見てこよう。そう思いました。

ジャカルタに着いたとき、私には全くといっていいほど異和感がありませんでした。マレー系の人がほとんどで、彼らの顔つきや話す言葉も私が知っている人たちのものと大して変わりがなかったからです。宗教もイスラム教で、文化的にみてもマレーシアと同じように、私の目には初め、そう映りました。しかし、実際に町を見てまわり、そこの人たちとふれあうと色々な違いがあることがわかりました。国の規模、民族構成、地形的要因、行政や経済、そして歴史などの違いから、それぞれ独特の文化、思想、国民性を創りあげているのだと思います。私がみ見たところ、東南アジアでは、他国に占領された歴史をもつか否か、又どの国によって支配されたかが各国間の相違に大きく影響しているようです。

タイはマレーシアやインドネシアのように他国から大きな侵略をうけた歴史をもたず、ずっと独立を守ってきた国です。それゆえにその文化はタイ個有のものでした。というより、色んな民族が色んな文化をもってタイに集まり、長い歴史の中でそれらが融合され一つの〝タイ文化〟を創りあげたといった風でした。その事も、マレー・中国・インドの全く異なった文化が混在しているマレーシアとは大きく違う点でした。

こうして東南アジアの国々の相違点をとらえていくうちに、その多様性に魅了されてしまいました。とかく日本ではタイ、インドネシア、マレーシアを〝東南アジア〟という漠然とした言葉でとりあげがちなため、個々の〝違い〟―民族・文化・宗教・経済等あらゆる面においての―をみることがありません。でも実際は〝東南アジア〟という言葉だけでは表現しきれない程、文化も国民性も社会情勢も違うことを知りました。

これだけ多様性に富んでいれば、国際協力をする場合も容易ではない。そう感じ始めたのは、九日間の研修旅行も半ばを過ぎた頃でした。いろんなプロジェクトを見学させていただき、国際協力に携わる多くの方にお会いしました。インドネシアではアセアン人造りセンターやボゴール農科大学等、タイでは放送大学や労災リハビリセンター等です。これらの設備は私の想像以上にすばらしいもので、それにみあった技術協力もなされていました。その国に本当に役立つ協力、その国が望んでいる協力ができるよう、色々考慮しながら実践されている様子が、どの方のお話の中にも伺うことができました。国際協力において、その地域の経済状態や文明化の度合いだけでなく風土や文化、社会情勢等あらゆることを考慮する必要性を改めて痛感しました。

タイの労災リハビリセンターで所長さんがこんなことをおっしゃいました。タイには日本のように、障害者に対する社会保障も保険もなければ、十分な施設もない。しかし家族で支えあって生活している。日本ではお金や施設では恵まれているが、そういう施設を訪れることさえしない家族もいる。〝いったいどっちが幸せなんでしょうね〟と。この言葉に文明化の矛盾を感じました。この矛盾をできるだけ少なくするのが、本当の意味での国際協力だと感じました。自分の中に多くの認識と疑問を残し、九日間の旅を終えました。

多様性の中にも東南アジアらしさという一つの共通文化をもつ不思議な国々。私に新しい価値観を教えてくれた人々。またいつか訪れたいと思います。新たな発見を求めて。

沖縄への研修旅行の感想

聖ヨゼフ学園日星高等学校　二年　グエン・ティ・ミン・レイ

私が今回自分の恐ろしい経験を書いた目的は、多くの日本人に難民のことについて、よく理解してほしい、平和について考えてほしい、そのために協力してほしいと思ったからです。でも、自分の作文が特別賞に選ばれるとは全然思っていませんでした。入選したということを聞いた時の私は口で言えない程のうれしさで一杯でした。大変感動しました。そして、この特別賞で沖縄への研修旅行に行くことが出来たのです。

私には、沖縄に住んでいた友達がいます。その友達は私と同じベトナム難民で沖縄での色々な経験を話してくれました。そして又今年、卒業した私達の学校の先輩達も沖縄に学習旅行に行き、その話をしてくれました。その時から私も一度行ってみたいと思っていました。沖縄に旅行することは私の一つの夢でもあったのです。

あの時海の上で神様に救われていたから私は又多くの夢を持つことができ、今回その中の一つが達成されました。沖縄旅行は二泊三日でした。この間、私は沖縄について沢山の事を学ぶことが出来、友達も出来、とても楽しい時を過ごすことが出来ました。沖縄についての印象はまず、川が少ないということです。湿度が高く、しかも水量は非常に少ないのです。それで断水がよくあります。それで多くの家庭の屋根にはタンクがつけられていて雨水を貯めています。水の大切さを改めて知らされた感じです。沖縄支部から国際センターに行く間、道の両側に網の壁がずっと続いていました。その壁の中はアメリカ軍の基地です。小さな島をそのように区切らねばならない心の分裂をとても悲しく残念に思いました。又、国際センターに泊っている間にそこで研修している多くの外国人と友達になりました。わたしたちは、自分の故郷のことを語り合い、ディ

スコもしました。とても楽しい時でした。二日目は沖縄の本部を訪ねました。海洋博覧会記念公園の水族館でも声をあげたい程感動しました。本当に大変奇麗でした。そのあとは真白なコーラルサンドの砂浜のエキスポビーチで泳ぎました。海の水も大変青く小魚まで見えました。又このビーチからの伊江島の眺めも素晴らしいものでした。三日目には空港に行く前に首里によって支部長の方が案内して下さり「守礼之門」と「玉陵」を観光しました。首里は沖縄で一番古い町です。「守礼之門」の言葉は中国人が沖縄をさして言ったもので「平和主義の国」の意味だそうです。そして「玉陵」は第一黄金時代の遺産です。墓陵内は二重の石垣が築かれ、三基に分かれた基室は、自然の岸壁をくりぬいて作られた岩影葬の一種で中央は洗骨前の遺骸を収める、いわゆるシルヒラシで、その左側の墓室には国王と王妃、右側の墓室には王子及び王女の遺骨を収めることになっていたと伝えられています。

あの高い大井の家、美麗なobikochoの花、マンゴの木、砂糖キビの畑、美しい白砂、そして南国の暑さ、家のような墓、沖縄のあの景色のすべてがまるで自分の故郷のようでした。沖縄に行ったのに、故郷に帰れたような気がしました。七年振りに色々な物を見て、沢山の忘れられない想い出を作れ、感動した三日間でした。そして、沖縄の方の心の暖かさもまだ生き生きと私の心の中によみがえります。沢山の方に、その事を感謝しています。この研修旅行は私にとって初めての旅行でした。将来自分でもう一度沖縄に行きたいと思っています。

三、審査講評

審査を終えて

日本私立中学高等学校連合会
次長　馬場孝正

先端技術の急進が科学文化の様相をどんどん変えつつあり、情報伝達手段、輸送運搬手段などの進歩と相まって社会生活の変革が訪れて来て居る。人類にとっても、私どもの国にとっても国際化の波は避けられない状況となって来た。臨時教育審議会の答申を待つ迄もなく、わが国教育にとって直面した大きな課題である。

国際化に対応する諸施策の立ち遅れを危惧する関係者に幾らかでも安心感と救いを与えて呉れるものが、若い高校生の皆さんの多数の応募作品であった。昨年約四千五百名、百八十七校の応募に対し今年度は二千七百余名、約二百校の参加があった。広く私立学校を含め参加範囲が広がった事はよろこばしい。男子生徒の割合にくらべ女子生徒の割合が急増した事は特筆されてよい。最終審査まで残った28点の中から特選2点、準特選2点、審査員特別賞2点、入選5点、佳作10点、合計21名の応募者が入賞した。

全作品から受ける印象は、突飛な思いつき的な発想が減り、地道な堅実な、しかも青年らしい柔軟な精神に溢れており、着実に国際化への対応が進んで居る個々の高校生像を示して呉れた。

文部大臣奨励賞を受けた高知農業の小田君、外務大臣奨励賞受賞の磐田農業の鈴木君、いずれも実業高校にあって実習を通しながらの海外雄飛の夢が、いずれも南米地域であったのが面白かった。小田君は現地に生まれ育ったため「国際化」の前提とされる。プリミティブな諸条件は卒業済みで、視点も確実、考える手順も手堅く期待して楽しみな状況にある。国際

化とは無国籍になるのでなく、更に深く正しく母国の文化・伝統・歴史を身につける事、そのために農業技術以外の勉強も大切と認識して居るのは心強い限りである。それらの認識に立って十分な勉強をされ、身につけて再び渡航される事を切望してやまない。

鈴木君の場合は、現代日本の一般的標準像が見えて面白かった。戦後四十年、太平の中にどっぷりとつかった日本人社会の実像がそこにあった。「地球は青く、美しかった」と言う青年のあこがれに似た夢は夢として、地球の実態はもっともっと非情で荒々しいものではないだろうか。特にアマゾン、そのジャングルは冷酷無惨な存在ではないのだろうか。豊かで平和なこの国を出て、外地に身をおいた時、不撓不屈の心と、それを支える強健な身体を鍛えておかれる事を心から希望する次第である。

いずれにしても高校生の皆さんの心がひろく開かれ、心身共に国際化への道を進みつつある事をこの多数の応募作品から見出した事は何よりも大きな事であった。今後益々の研鑽を祈り講評とする。

資料編

昭和六十一年度高校生懸賞作文応募状況

募集期間：昭和六十一年三月一日～五月三十一日

応募総数：二、七三四点

① 地域別（支部別）応募状況

支部	応募総数	全体率
北海道	一六	〇・六％
東北	四九八	一八・二％
関東	五四二	一九・八％
中部	一五四	五・六％
関西	六〇五	二二・一％
中国	四二	一・五％
四国	二九	一・一％
九州	八三七	三〇・六％
沖縄	二	〇・四％
合計	二、七三四	一〇〇％

② 男女別応募状況

男子	三三・五％
女子	六六・五％

昭和六十一年度高校生懸賞作文審査委員

板橋　英一（全国高等学校国際教育研究協議会会長）

中根千枝（東京大学教授）

堀越　克明（日本私立中学高等学校連合会会長）

宮崎　緑（NHK「ニュースセンター9時」キャスター）

田島高志（国際協力事業団総務部長）

（アイウエオ順―敬称略）

昭和六十一年度高校生懸賞作文入賞者（校）一覧

賞	氏名	学校	学年	住所	備考
特選	鈴木宏尚	静岡県立磐田農業高等学校	2	〒438 静岡県磐田郡豊田町東原七七一一六	外務大臣奨励賞
〃	小田義典	高知県立高知農業高等学校	2	〒783 高知県南国市東崎九五七―一	文部大臣奨励賞
準特選	相澤清香	長野県長野高等学校	2	〒381-22 長野市真島町真島六〇〇	
〃	後藤多恵	和歌山県立橋本高等学校	3	〒648 和歌山県橋本市東家二―六―八	
審査員特別賞	齋藤潤一	千葉県立千葉高等学校	3	〒280-01 千葉市多部田市七五五―四五	
〃	グェン・ティ・ミン・レイ	聖ヨゼフ学園日星高等学校		〒624 京都府舞鶴市上安久三八一 日星高等学校マリア寮	
入選	梅津恵理	宮城県仙台向山高等学校	3	〒982 仙台市向山四―十五―一	
〃	黒駒真喜子	作新学院高等部女子部	3	〒320 宇都宮市天神二―九―一〇	
〃	今鷹祐	セントヨゼフ女子学園高等学校	3	〒514 三重県津市上浜町六―一一二―三	
〃	松山直子	聖ヨゼフ学園日星高等学校	3	〒625 京都府舞鶴市溝尻長谷山一―五	
〃	瓜田理子	明治学園高等学校	3	〒804 北九州市戸畑区東大谷一―十二―一	

佳作	釜石智子	岩手県立盛岡盤学校高等部	2	〒020-01	岩手郡滝沢村大字大釜字風林五二九―一八大八地割	
〃	志村知華子	宮城県立第三女子高等学校	2	〒982-02	仙台市太白一―二一―一	
〃	吉田二郎	宮城県仙台南高等学校	3	〒982	仙台市緑ケ丘二―一二―三八	
〃	谷口真奈美	東京都立狛江高等学校	3	〒201	狛江市猪方三―二三―一三	
〃	細包剛	兵庫県立武庫荘高等学校	2	〒661	尼崎市西昆陽三―三一―二三	
〃	影浦浩二	愛媛県立松山商業高等学校	3	〒791-21	愛媛県伊予郡砥部町岩谷口五五六	
〃	北谷光	高松第一高等学校	2	〒761	高松市飯田町一〇三五―一	
〃	柳多美子	福岡県立浮羽東高等学校	3	〒839-12	福岡県浮羽郡田主丸町大字秋成五五八	
〃	溝川靖乃	川内純心女子高等学校	1	〒895-21	鹿児島県薩摩郡鶴田町柏原四三八九	
〃	町田宗和	沖縄県立嘉手納高等学校	3	〒904-02	沖縄県嘉手納町嘉手納七二四―二	
学校賞		福岡県立香住丘高等学校		〒813	福岡県福岡市東区香住丘一―一〇―十三	〇九二六六一―二一七〇
〃		学校法人熊見学園神戸女子商業高等学校		〒653	神戸市長田区腕塚町六―一―二二	〇七八六一一―一一四三
〃		東京都立狛江高等学校		〒201	狛江市元和泉三―九―一	〇三四八九―二二四一

賞	氏名	学校	学年	住所	備考
学校賞		岩手県立花巻農業高等学校		〒025 花巻市葛第一地割六八	〇一九八 二六―三一三二
〃		長野県南安曇農業高等学校		〒399-82 南安曇郡豊科町豊科四五三七	〇二六三七 二―二一三九
〃		岩手県立北上農業高等学校		〒024 北上市相去町高前壇一三	〇一九七 六七―二一一二
契励賞		宮城県多賀城高等学校		〒985 多賀城市笠神二―十七―一	〇二三六 六―一二二五
〃		熊本県立蘇陽高等学校		〒861-39 阿蘇郡蘇陽町滝上二二三―二	〇九六七八 三―〇〇七二
〃		学校法人聖和女子学院		〒857 佐世保市松山町四九五	〇九五六 二二―九六四三
〃		水口女子専門学校		〒528 甲賀郡水口新町一―五―三一	〇七四八六 二―一一六一
〃		三重県立久居高等学校		〒514-11 九居市戸木町三五六九―一	〇五九二五 六―〇〇〇二
〃		福島県立東白川農商高等学校		〒979-61 東白川郡棚倉町字東中居六三	〇二四七 三三―三二一四
〃		三重県立宇治山田商業高等学校		〒516 伊勢市黒瀬町札の木一一九三	〇五九六 二二―一一〇一
〃		兵庫県立西宮甲山高等学校		〒662 西宮市鷲林寺字剣谷一〇	〇七九八 七四―二九六〇

JICA